



Title	オープンサイエンスの制度設計と実装に向けた大阪大学のアプローチ
Author(s)	甲斐, 尚人
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/103660
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

2025年12月11日(木) 13:30～14:20

場所:大隈スクエアビル3階会議室

オープンサイエンスの制度設計と実装に向けた 大阪大学のアプローチ

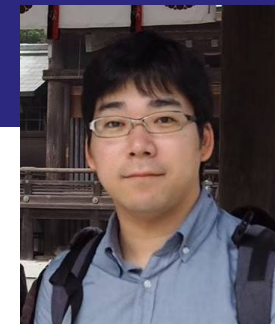
大阪大学D3センター 甲斐尚人

2025年度 大学業務ソリューションセミナー

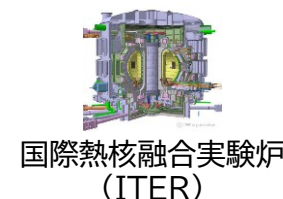
～他大学の先進的な取組を共有し大学の未来を拓く～ 日本の大学の未来を共に考える2日間

本講演で述べる意見や見解は、私の個人的な見解を含みます。

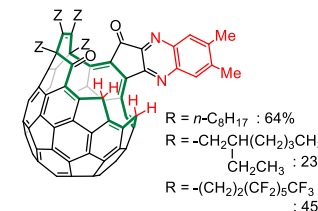
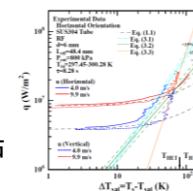
自己紹介



- 名 前 甲斐尚人 博士(ライブラリーサイエンス)
- 所 属 大阪大学D3センター(データビリティプラットフォーム研究部門)
兼 基礎工学部、大学院情報科学研究科、附属図書館研究開発室、オープンサイエンス推進室
- 専門分野 図書館情報学、研究データ管理、ナレッジマネジメント、技術継承、暗黙知
 - 博士論文(図書館情報学、記録管理学)
「円滑な技術継承のための企業内マニュアルを活用した暗黙知抽出に関する研究」
 - 修士論文(伝熱工学)
「短い円管内における水の乱流熱伝達に関する研究」
 - 卒業研究(有機合成)
「長鎖アルキル基を有する開口フラーレンの合成」
- 学外委員 「AI等の活用を推進する研究データエコシステム構築事業」運営委員会委員、
AXIESデータマネジメント部会副査、 JPCOAR運営委員会委員・研究データ作業部会主査、
NII研究データ基盤運営委員会委員など
- ウィーン大学Data Stewardコース修了(2023.10~2024.9)



国際熱核融合実験炉
(ITER)



本日のお話の導入

■ オープンサイエンスの制度設計と実装とは？

研究データが生まれてから活用されるまでの価値が循環する仕組みをつくること

■ 現実には…

体制・ルールだけ整っていても…

基盤だけ整っていても…

人材だけ育成しても…

現場は動けず「形骸化」

活用されず「宝の持ち腐れ」

属人的で「持続しない」

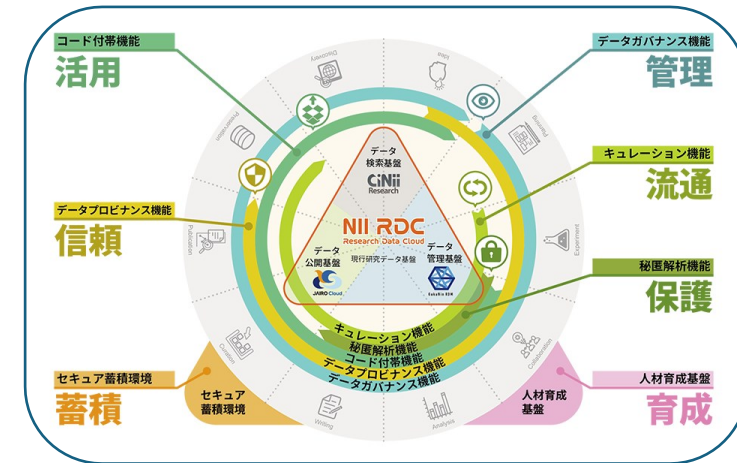
■ だから意識すべきなのは…

体制・ルール × 基盤 × 人材 を【つなぐ】進め方

この三要素が噛み合ったとき、研究データエコシステムが回り始める
(と考えています)

■ これによって…

- ・ 研究支援者がデータを扱える(管理に関与できる)
 - ・ 研究者が必要に応じて迷わずデータを公開できる
 - ・ データが次世代の研究の種として残り続ける文化が根付く
- ➡ こうして新しい価値が蓄積・循環し、研究力が組織として底上げされる



大阪大学のアプローチ・実践例を紹介します

本学のオープンサイエンス推進を
支える学内体制・基盤

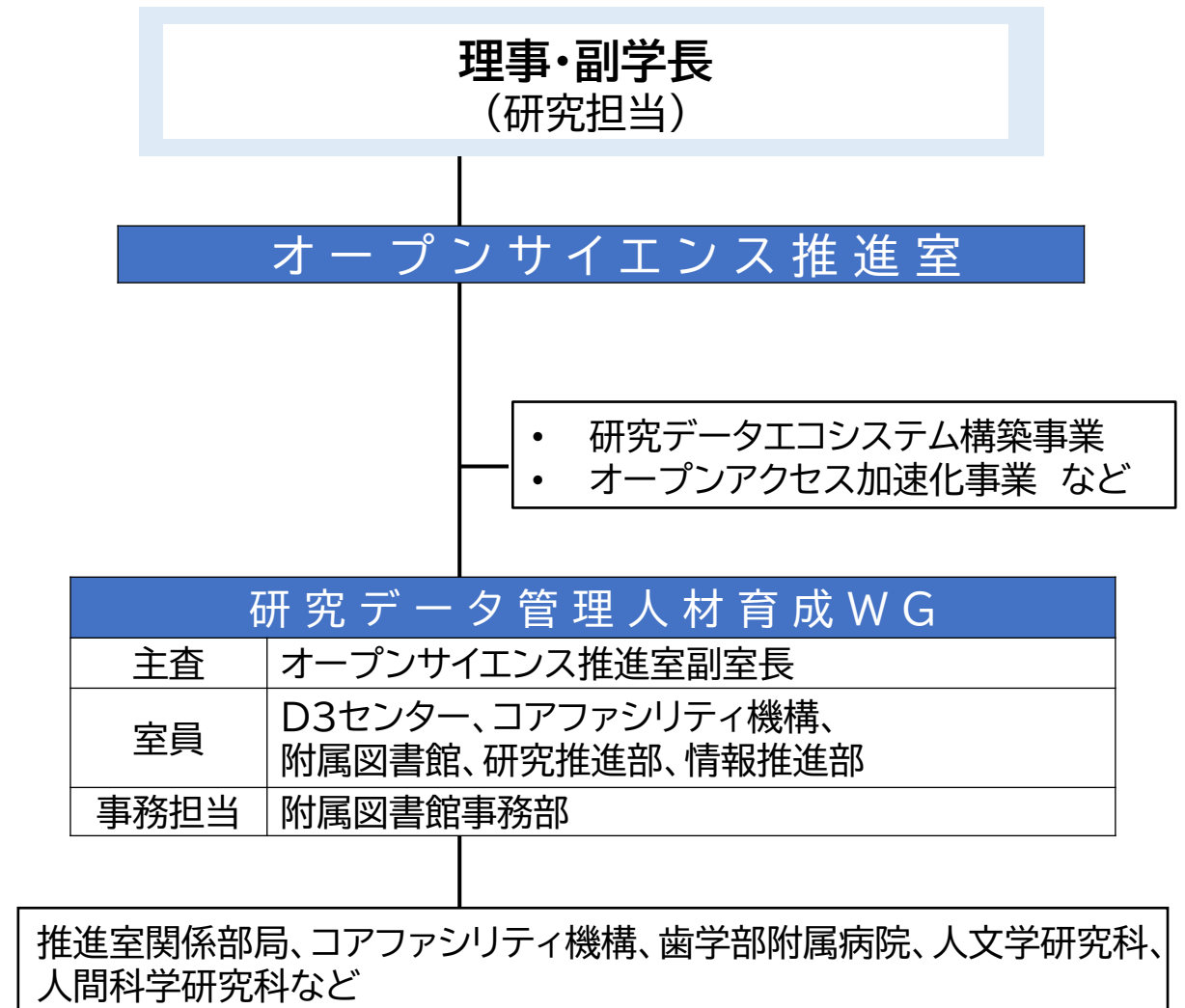
本学のオープンサイエンス推進体制

◆ 研究推進本部 オープンサイエンス推進室

役割: オープンサイエンス推進、各実施項目の進捗管理 教員: 7名、職員: 3名	
室長	研究担当理事
副室長	D3センター 招へい教授
室員	① D3センター(図書館系)准教授
	② D3センター(サイバーメディアセンター系)教授
	③ D3センター(データリテリシティ機構系)教授
	④ 経営企画オフィス 教授
	⑤ コアファシリティ機構 教授
	⑥ 研究推進部長
	⑦ 情報推進部長
	⑧ 附属図書館事務部長
オブザーバー	・社会技術共創研究センター長・教授 ・共創機構 教授
事務担当	研究推進部研究企画課

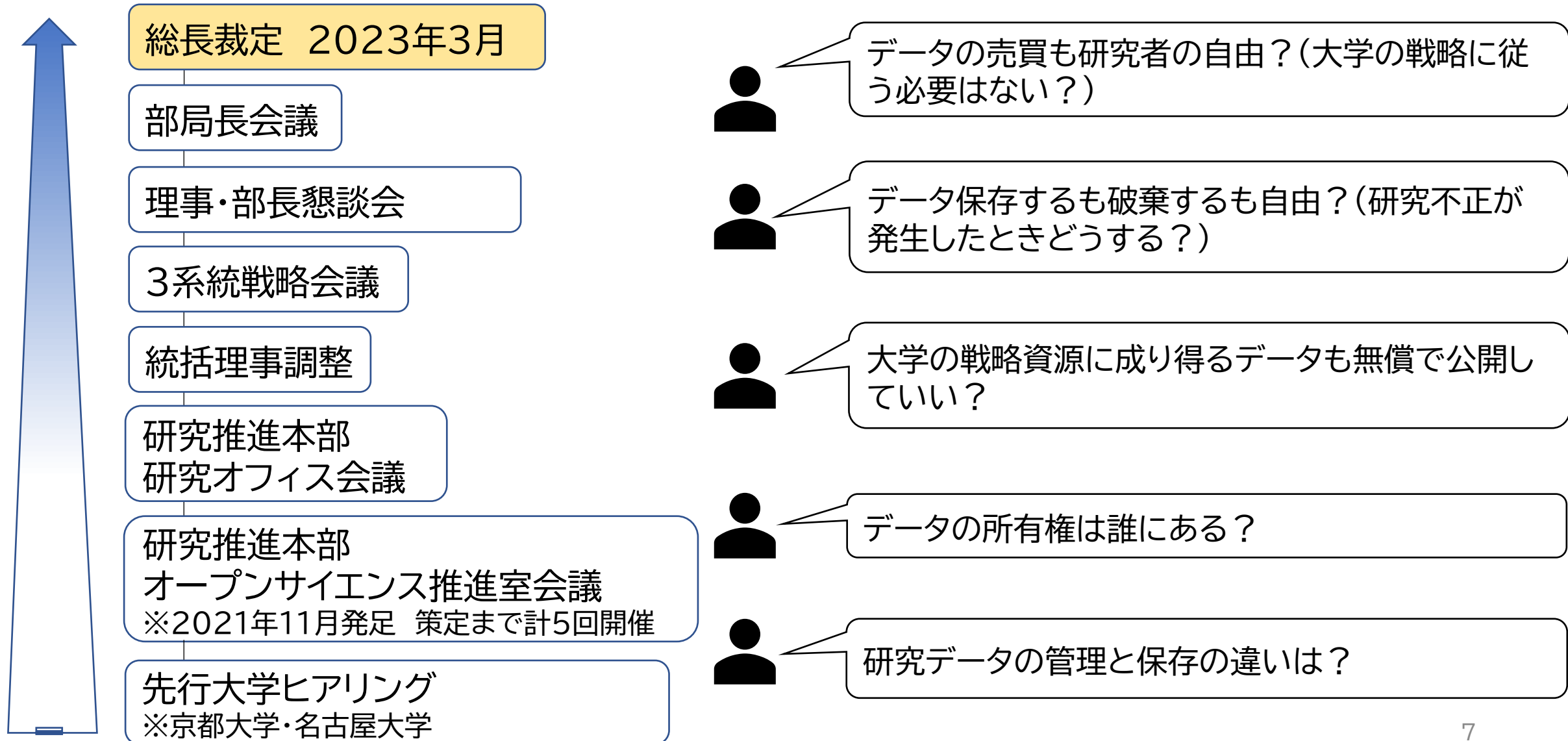
オープンサイエンス
推進を支える主要な
事務組織として連携

◆ 基盤連携・人材育成の推進体制



研究データポリシーの策定状況

ポリシー策定までの道のり



策定までの経緯詳細

開催日	会議名	内 容
2021年10月	—	先行大学等の研究データポリシーの調査 — 京都大学、名古屋大学のキーパーソンにインタビュー — iLDi研究拠点(Society5.0)の研究データポリシー作成教員にインタビュー
2021年11月	—	研究推進本部内にオープンサイエンス推進室を設置
2021年11月	研究オフィス会議	ポリシー策定に向けた先行大学調査の状況説明 ポリシー素案作成開始を報告
2021年12月	第1回 オープンサイエンス推進室会議	ポリシー素案の提示・議論 研究公正とオープンサイエンスのバランスの取れたものにする ※データは単なる研究の副産物ではない
2022年 2月	第2回 オープンサイエンス推進室会議	ポリシーたたき台の提示・議論 前文(理念・大阪大学が目指す将来像との整合性など)・定義(研究者、研究データ、研究データ管理)、研究者・大学の責務など
2022年 4月	第3回 オープンサイエンス推進室会議	ポリシーたたき台の修正・議論 ポリシー解説素案の提示・議論 ※オブザーバーとして社会共創研究センター(ELSIセンター)が参加
2022年 6月	第4回 オープンサイエンス推進室会議	ポリシーたたき台の修正・議論 ポリシー解説たたき台の提示・議論
2022年 7月	研究オフィス会議	ポリシーおよびポリシー解説たたき案の提示・議論 ※以降の調整はオープンサイエンス推進室長に一任
2022年 9月 以降	各種調整 各種会議附議予定	現行規定とのバッティング有無の最終確認など ※今年度中の策定を目指す

法令・学内規定との関係性

大阪大学研究データポリシー (全ての研究データが対象)

- 研究データ管理計画を策定する
- 研究データを適切に取得・収集、保存する
- 可能な限り研究データを社会に公開し、その利活用の促進に努める

※ポリシーでは、以下のルール等に従い、公開・利活用することを規定
(現行規定とのバッティングはなく現行規定を包括する文脈)

研究データの公開に関する法令・学内規則

個人情報保護法、外国為替及び外国貿易法、経済安全保障推進法、
秘密保持契約、外国の知的財産法やEU一般データ保護規則などの
個人情報の保護に関わる法規など

研究データの利活用に関する法令・学内規則

発明
特許法
大阪大学発明規程

データベース
著作権法

ノウハウ
不正競争防止法(一部)

臨床研究データ
薬機法・臨床研究法
大阪大学臨床研究データ利用
許諾等規程

研究成果有体物
薬機法・臨床研究法
大阪大学研究成果有体物規程

空白部分のルール作りが
今後の課題
(オープンアンドクローズ戦略)

※ポリシーでは、「別途大学内で定められる研究データ
の公開・利活用に関する方針」と規定

研究データ管理の必要性

◆ 人間の記憶は頼れない

「3日前の晩ご飯も曖昧」なのに、複雑な実験・分析・フィールド調査を完全に記憶で再現するのは不可能。

◆ 記録がなければ「やっていない不正」を疑われるリスク

- データの所在、生成過程(誰が・いつ・どう作成したか)、メタデータの有無など
⇒保存不足、ログ欠落、元データの所在不明、個人情報への無自覚な扱い、データ流出

記録がなければ 潔白でも証明できない事態が起こり得る

特に FFP(研究不正:捏造・改ざん・盗用)/ QRP(好ましくない研究活動) の観点でリスクが大きい

「管理対象データ」の定義は？ 分野差が大きいため 一概には定義は難しい。
→「最低限管理すべきデータ」を研究者・分野ごとに考えるアプローチが現実的。

実験データ

- 一度に複数のデータ(失敗とすぐ判別可能なデータ)
※化学実験の失敗データなどに全て同じ粒度のメタデータ付与は不要。
- 一度に大量のデータ(二度と取れないかも)
※天体望遠鏡からのデータなど
- のちの研究の種になるようなデータ(将来性をすぐ判断できない)

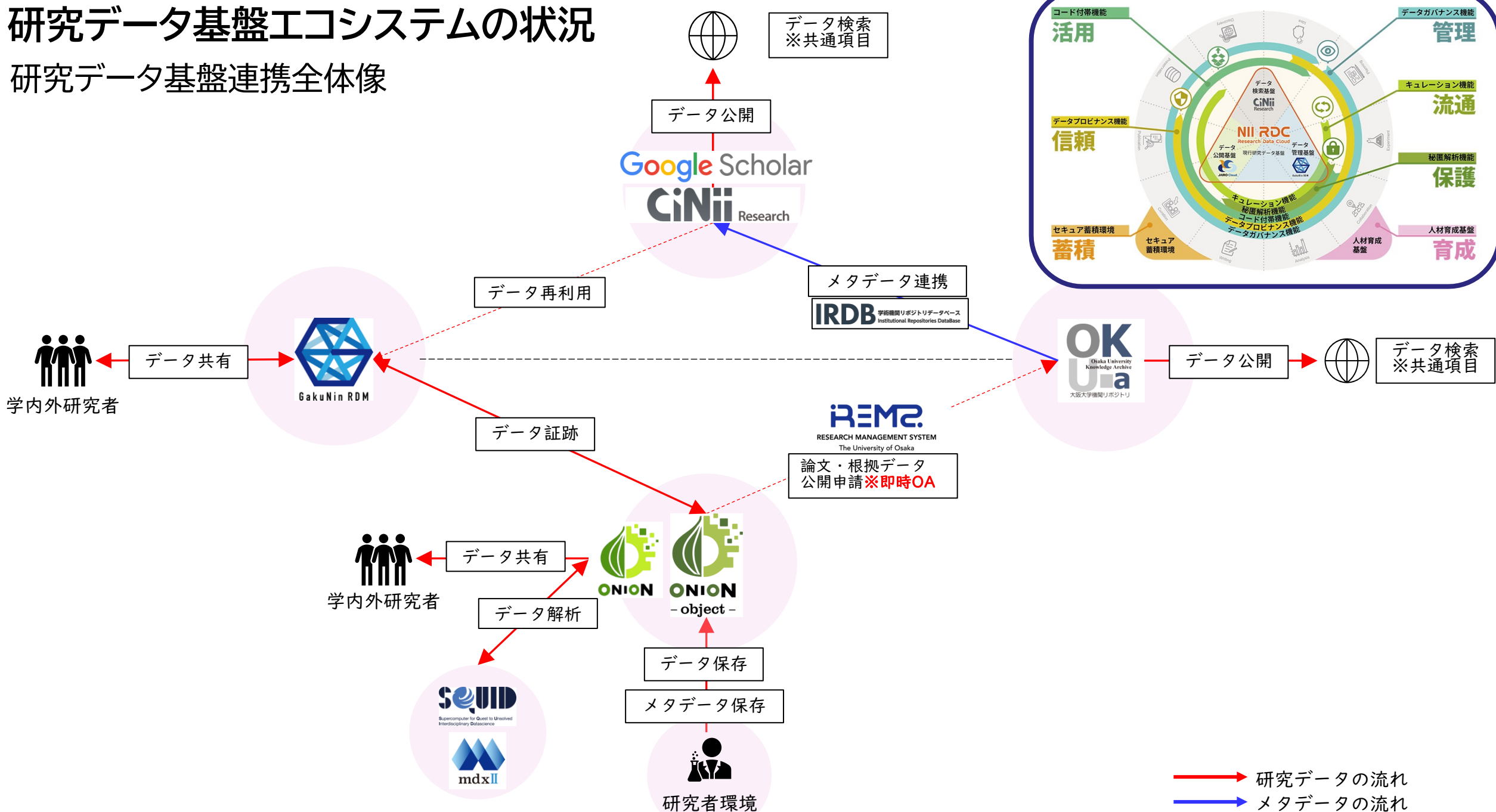
生命科学データ

- ラット実験



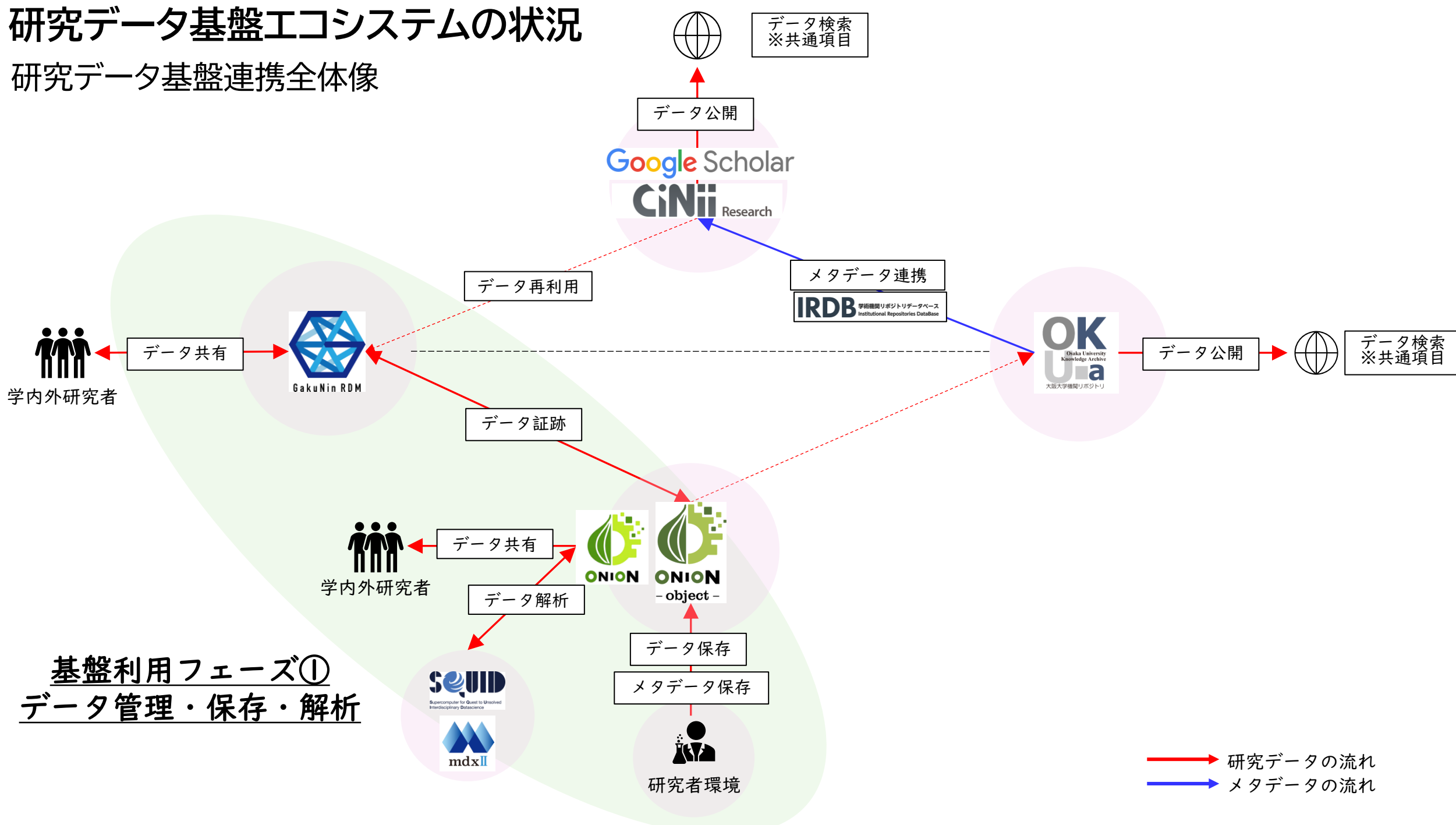
ここだけのメタデータだけで再現性はある？

研究データ基盤連携全体像



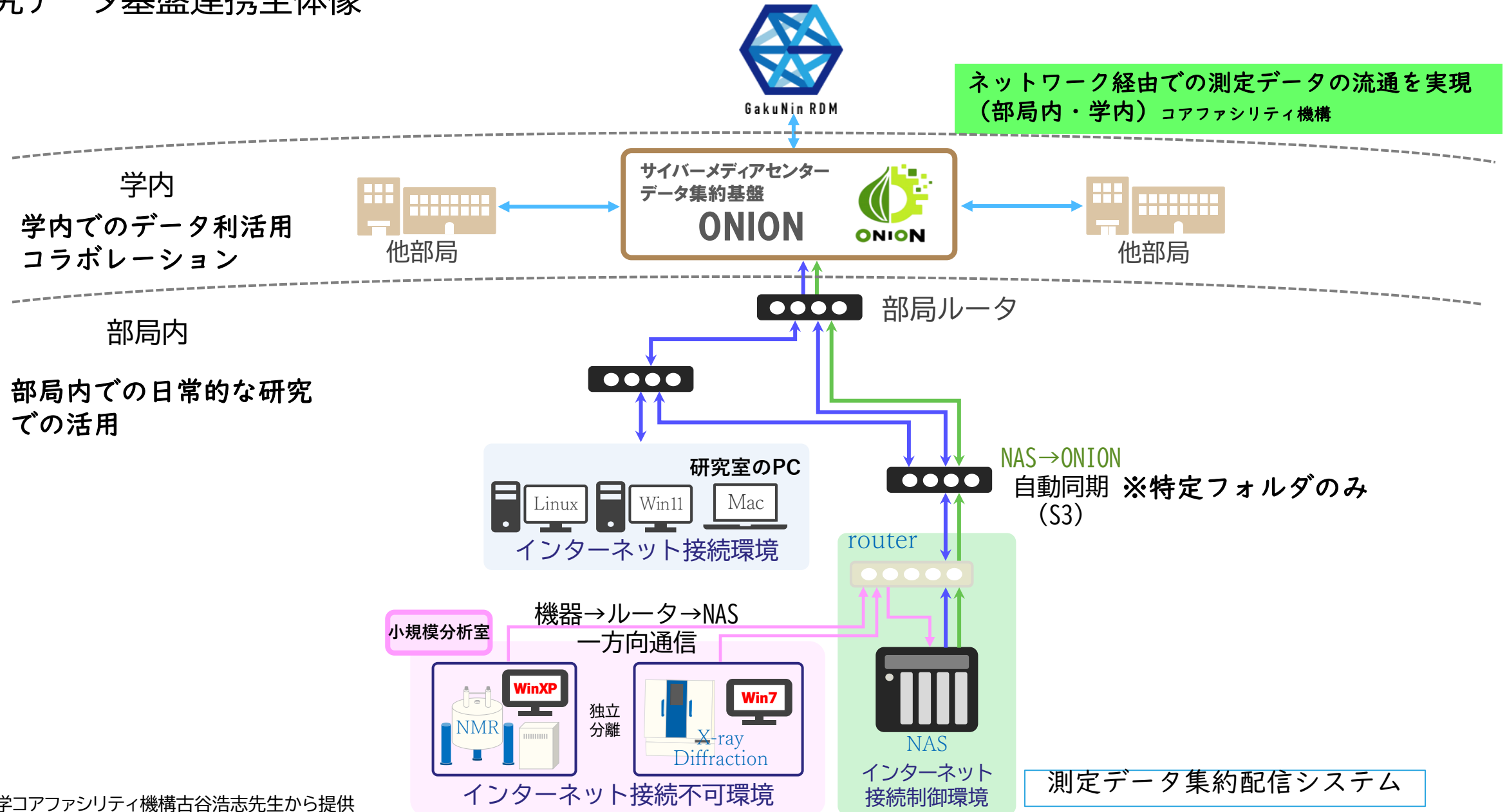
研究データ基盤エコシステムの状況

研究データ基盤連携全体像



研究データ基盤エコシステムの状況

研究データ基盤連携全体像

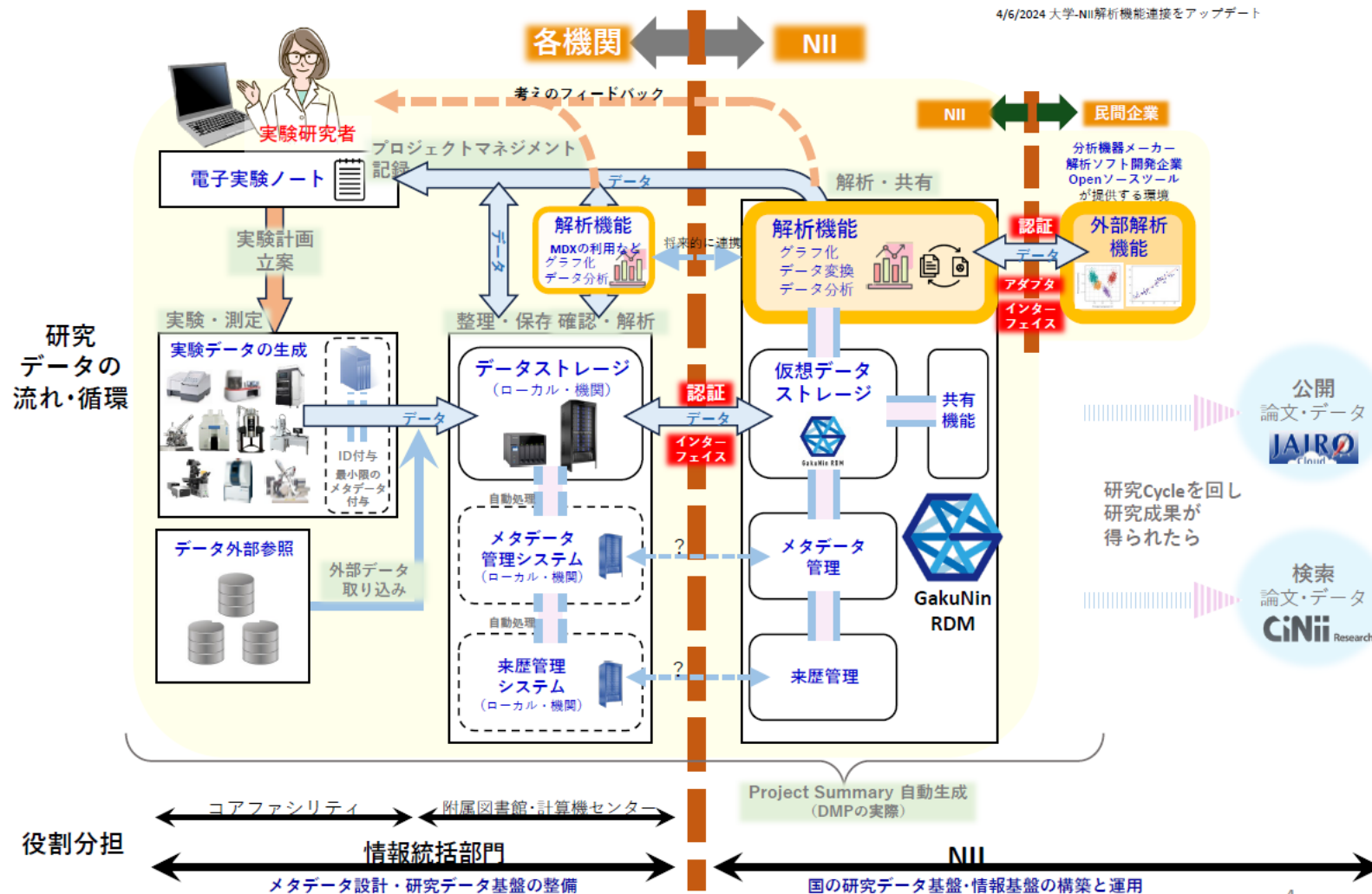


研究データをメタデータとともに基盤サイクルへ

実験系研究者の研究プロセスと研究データの流れ・循環

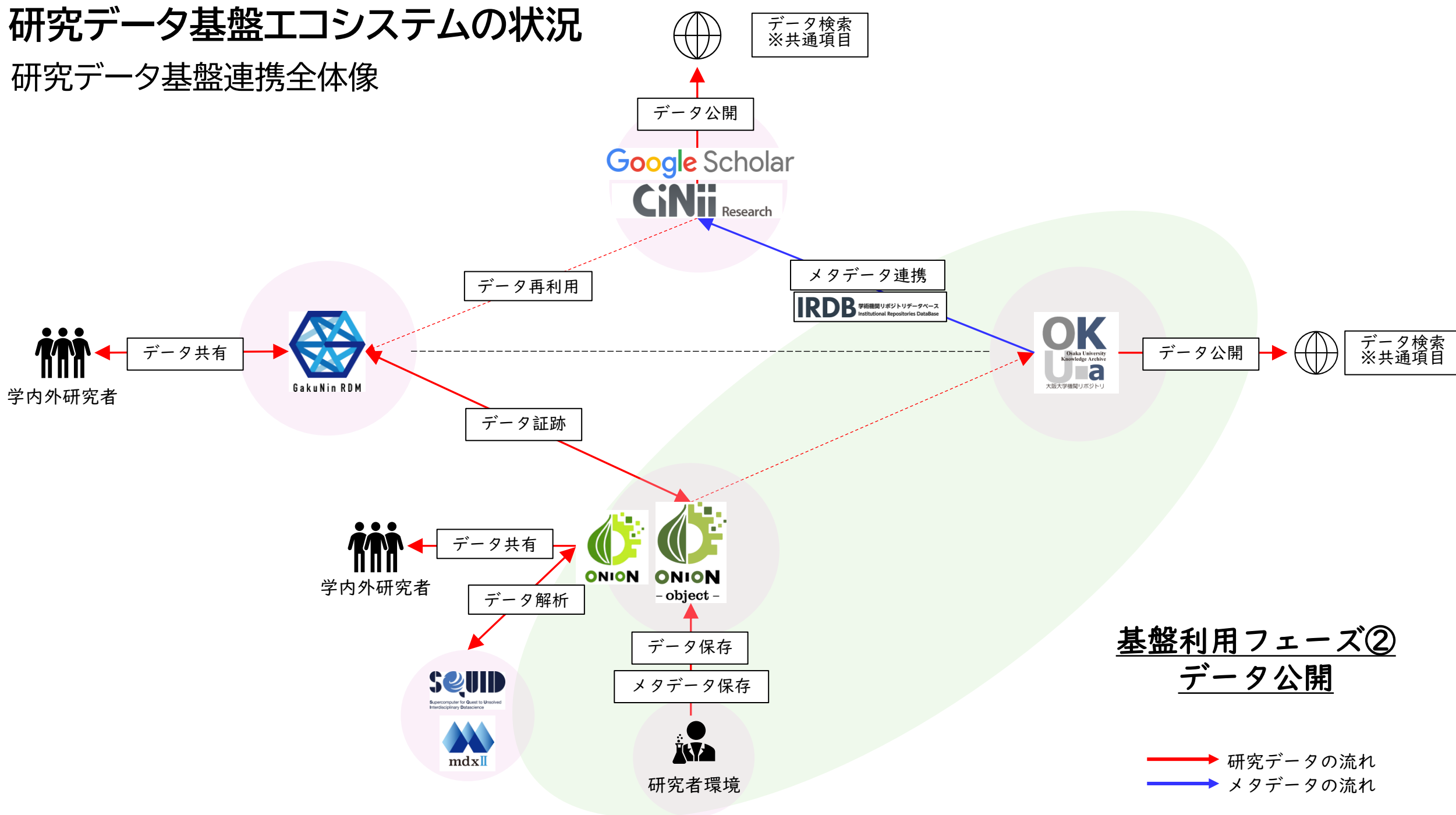
3/29/2024 PF連携チーム会議を受けてアップデート

4/6/2024 大学-NII解析機能接続をアップデート



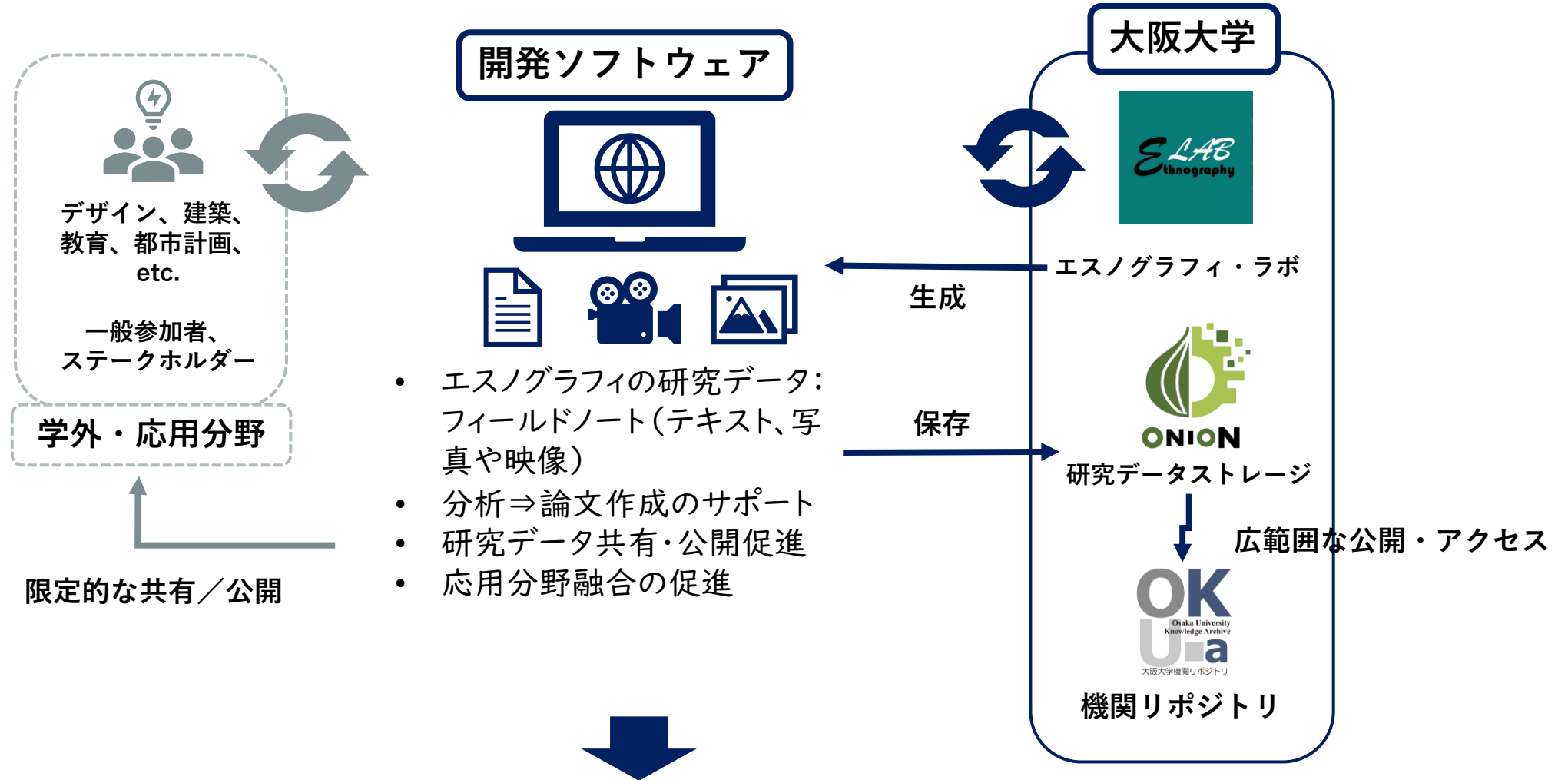
研究データ基盤エコシステムの状況

研究データ基盤連携全体像



「オープン・エスノグラフィ」のエコシステム連携

2022年度～ オープン・エスノグラフィのパイロットプロジェクト



人文社会系質的研究・フィールド調査系に適したエコシステムの追求

ONION_HOME - ファイル - ONION X

https://

ONION

ONION_HOME

+

名前

サイズ

更新日時

☐

qnonion01

共有中

...

43 KB

7日前

☐

Testset1

共有中

...

1003 KB

2日前

☐

Testset2

共有中

...

9.1 MB

2日前

☐

Testset3

...

136 KB

2日前

☐

Testset4

共有中

...

1003 KB

1日前

☐

Testset5

共有中

...

512.4 MB

2日前

☐

Testset6

共有中

...

107.3 MB

1日前

☐

Testset7

...

466 KB

1日前

8 個のフォルダー

631.5 MB

Testset7

466 KB, 1日前

アクティビ...

共有

公開申請

大阪大学の機関リポジトリ"OUKA"での公開を申請します。

申請者名

Test User

メールアドレス

test.user@XXXXX-u.ac.jp

備考

Testset7

公開申請

ONIONからの公開申請 (2023/07/11 11:19)

about:blank

削除

アーカイブ

報告

返信

全員に返信

転送

ONIONからの公開申請 (2023/07/11 11:19)

OF ONION file < >

宛先: 機関リポジトリOUKA連絡窓口

2023/07/11 (火) 11:19

Cc: Test User

申請者名: Test User

申請者メールアドレス: test.user@XXXXX-u.ac.jp

共有リンク: https://onion-link.url

共有アイテム名: Testset7

パスワード: Password

備考: Testset7

上記の研究データの公開を申請します。

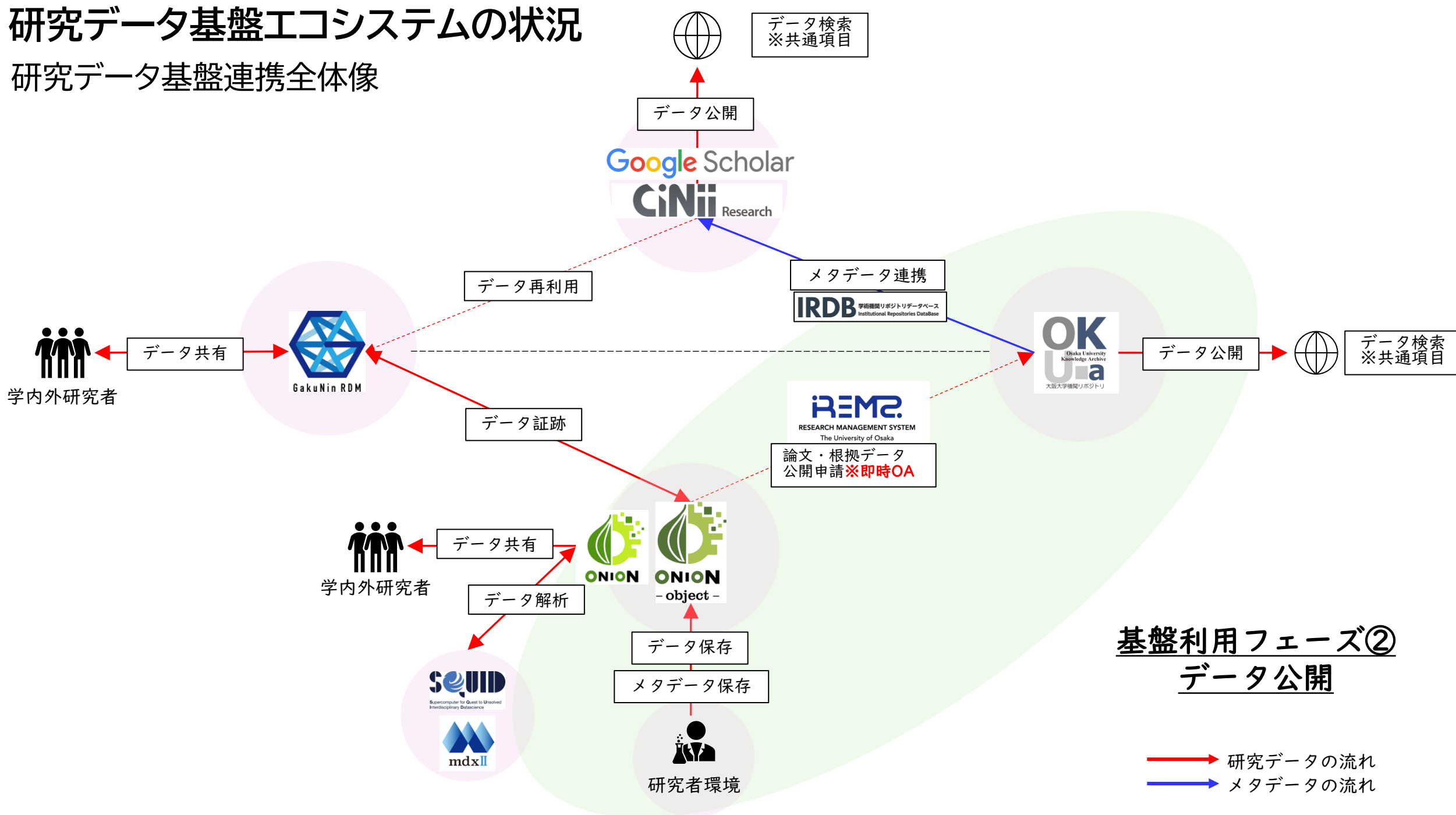
返信

全員に返信

転送

研究データ基盤エコシステムの状況

研究データ基盤連携全体像

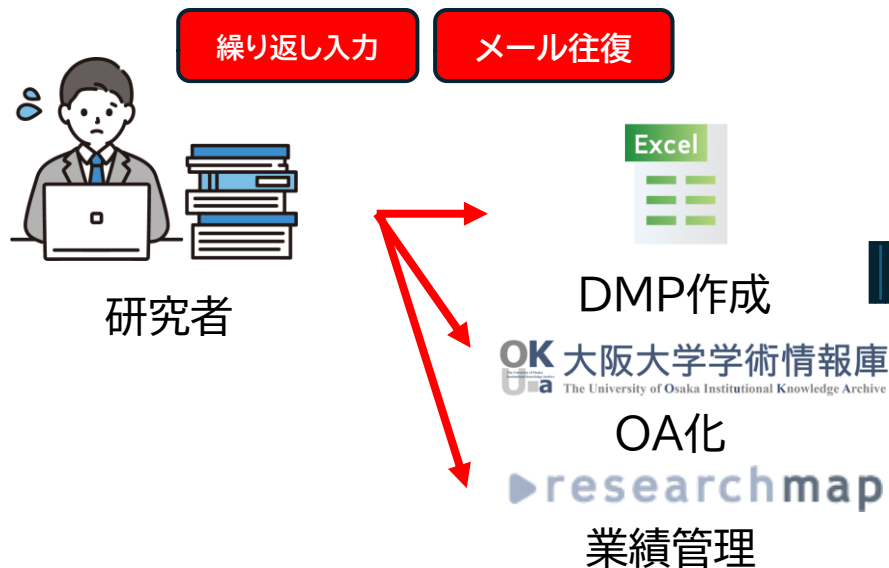


研究マネジメント総合支援システム(REMS)

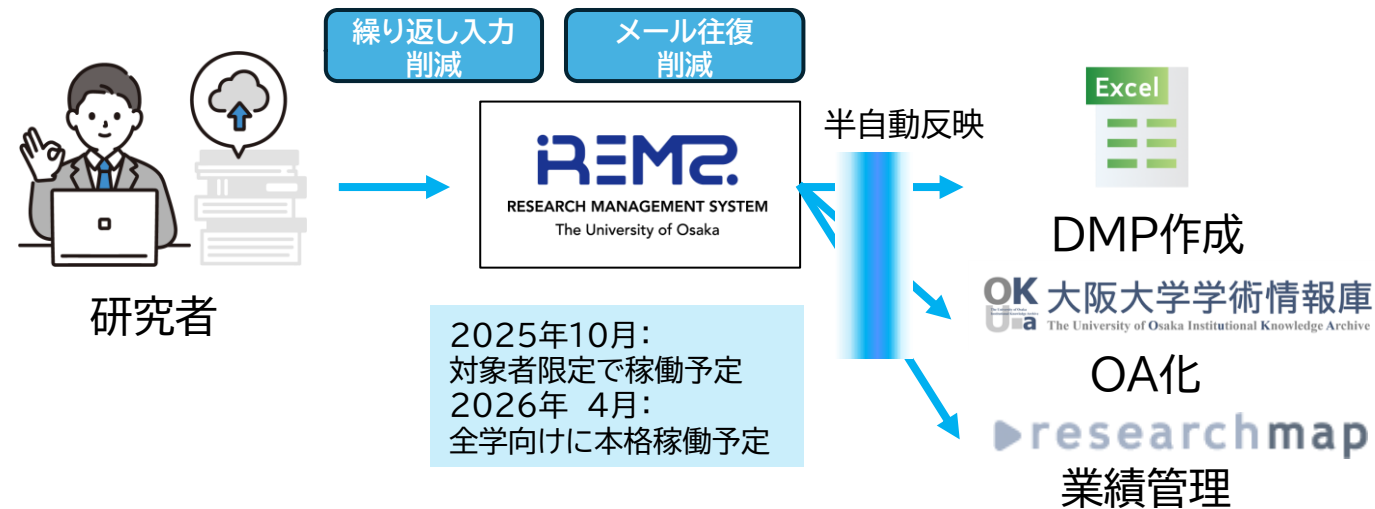
DMP作成必須化・オープンアクセス義務化による研究者の作業負担を軽減

- OA加速化事業予算で構築
- 研究マネジメントを総合的に支援する視点から構築
- **OA化支援だけでなく、DMP作成や研究業績管理、IR用アンケート機能なども付与**
- 総括: オープンサイエンス推進室、運用主体: 附属図書館、管理支援: 情報推進部、活用推進: 研究企画課、利活用: 学内各部局

これまで: 繰り返し作業と手間



これから: ワンストップ入力で省力化



2025年10月:
対象者限定で稼働予定
2026年 4月:
全学向けに本格稼働予定

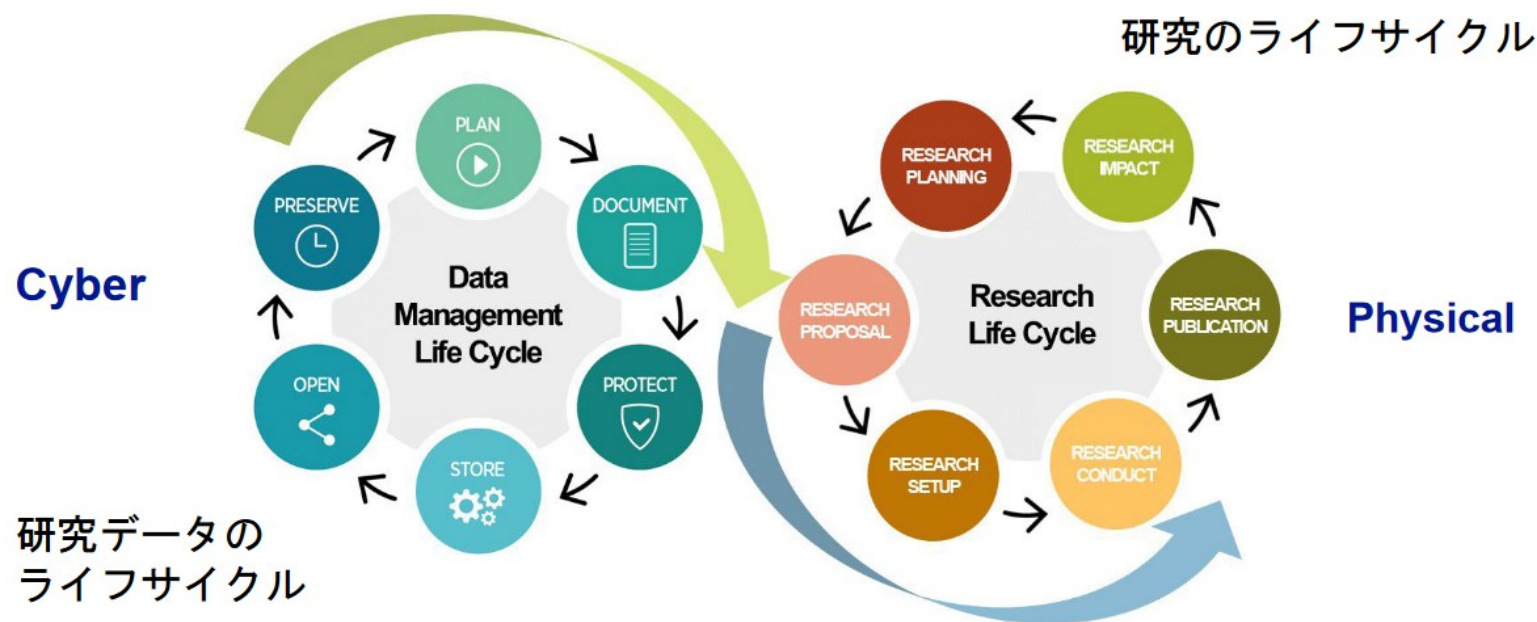
- ワンストップ入力: OUKA登録・researchmap連携・業績集積に半自動反映。
- 入力補助・代理入力: 書誌情報の自動取得。部局や支援者が代理で登録可能。
- DMPやPJ情報との連動: 同じ情報を繰り返し入力する必要なし。
- 自動通知・承認フロー: Power Automateでメールでのやりとり・確認を削減。

情報処理学会デジタルプラクティス(4月号)に掲載予定

本学が進める
研究データ管理人材の育成

研究データ管理の考え方（欧州と日本との違い）

研究のライフサイクルと データマネージメントのライフサイクル



[https://blogs.helsinki.fi/thinkopen/know-your-data-rdm-series-](https://blogs.helsinki.fi/thinkopen/know-your-data-rdm-series-1/)

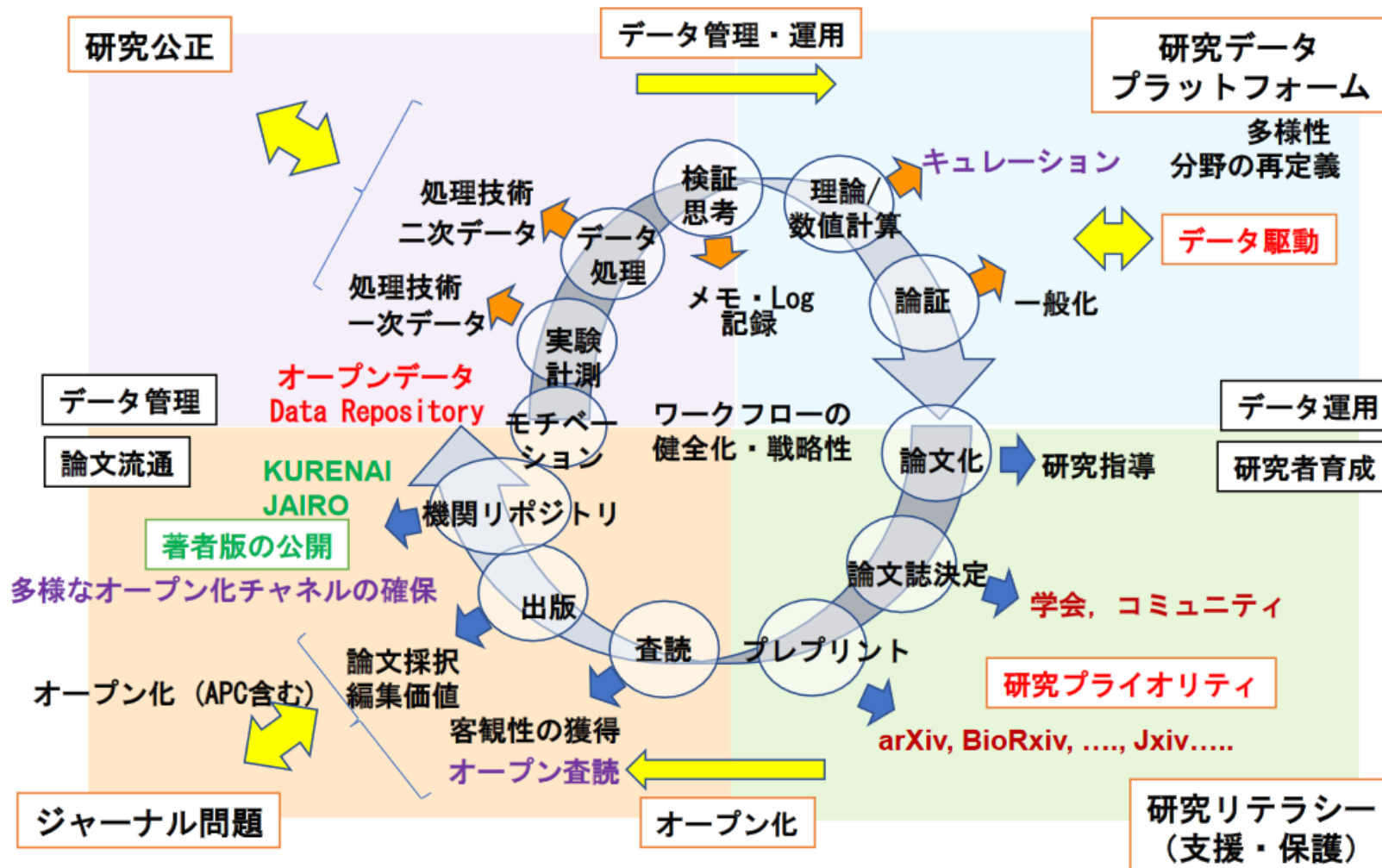
1/

システム系 Digital Twins のアナロジー的理解
(情報系技術者, 企業的理解)
相互のデータ運用ではなく分業

2
引原隆士先生「研究のライフサイクルと研究データマネージメント」
オープンサイエンス時代における大学図書館の在り方検討部会（第6回）（2022.11.14）

研究データ管理の考え方（日本における実態）

大学における研究のライフサイクル



研究データ管理の考え方（欧州と日本との違い）

大学のデータ運用支援と人材養成

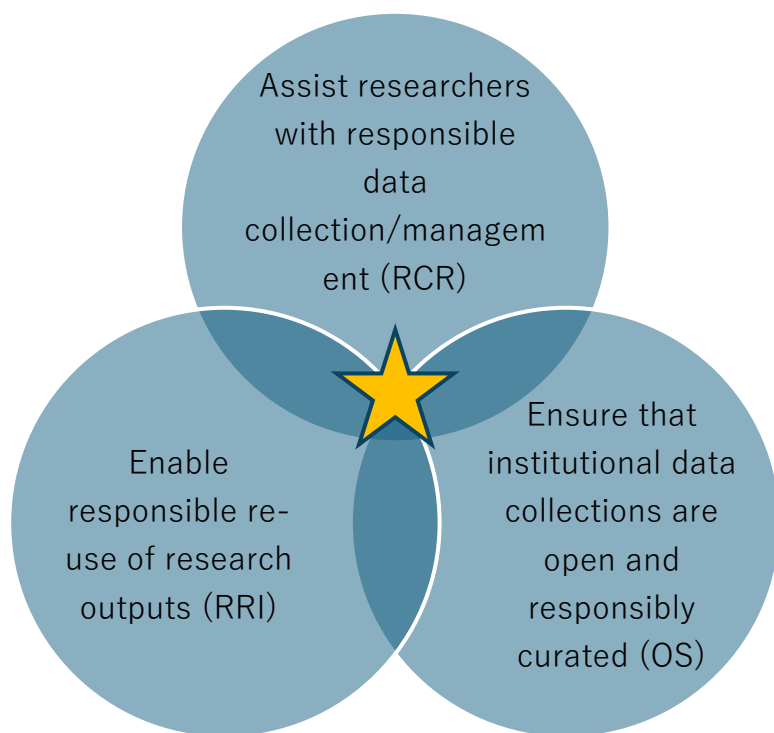


Data Steward

（コーディネーターのような役割）

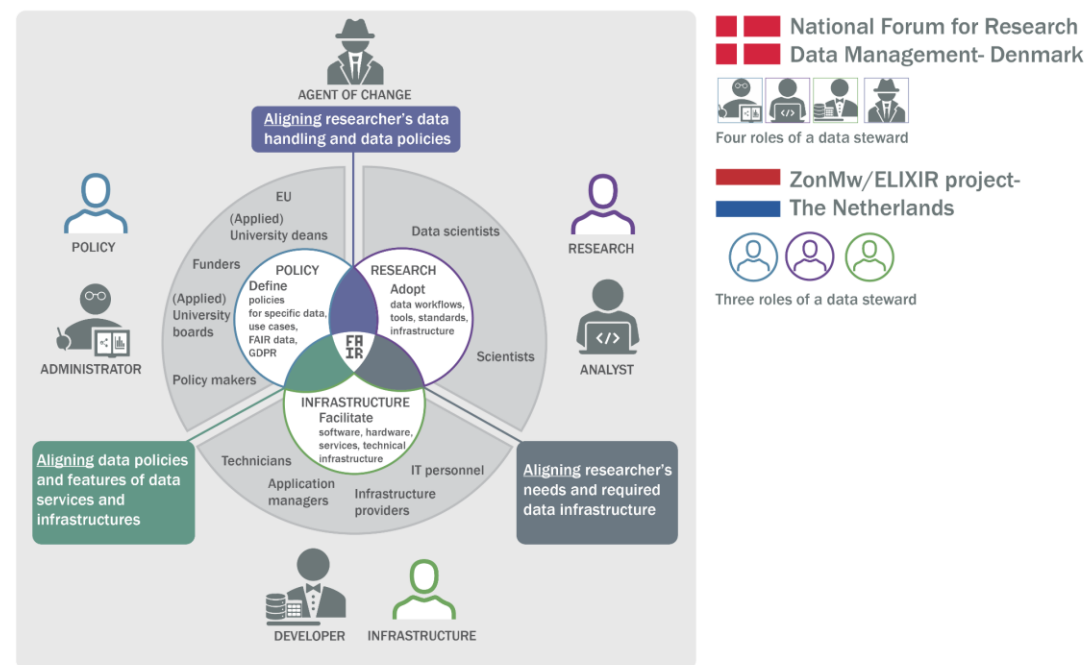
◆ Data Stewardship

研究機関が、データポリシーが守られるようにするために、研究および支援スタッフが一連の研究データのライフサイクル全体にわたってFAIRを確立する変革プロセス。



◆ Data Steward

研究者、ソフトウェア開発者、インフラ提供者（機関内外）などとの連携を図り、研究機関におけるデータスチュワードシップを実践するスタッフ。



■ウィーン大学 Data Steward Certificate Course (2023-2024)

参加国

欧州(オーストリア、リトアニア、ポーランド、ベルギー、スイス、チェコ共和国、アイルランド、イタリア、ドイツ、スウェーデン、ノルウェー)
+アメリカ合衆国+日本 計26名

参加者職種

Research consultant, RDM consuler, Researcher, Lecturer, Librarian, Data Librarian, Data Steward, PhD student, Repository manager, Data manager, OR Support Unit Lead, Bioinformatician, RDM and RDP Coordinator, Research coordinator, Research midwife, Data scientist, 3D lab Operator, Archivist



Course Dates

Module 1: In Vienna

- 4-8 lessons per day
- 1 lesson = 45 minutes
- Start: Monday 10 am
- End: Friday 12.30 pm

Modules 2-4: Online

- 6-8 lessons per day
- 1 lesson = 45 minutes

Attendance is mandatory
80 % per module!

Date	Module	Location
14.-18.10.2024	Module 1: Basics of Research Data Management and Open Science	in Vienna
14.-15.11.2024 12.-13.12.2024	Module 2: Basics of IT and Data Science	online
16.-17.01.2025 13.-14.02.2025 13.-14.03.2025 10.-11.04.2025	Module 3: FAIR Research Data in the Life Cycle	online
15.-16.05.2025	Module 4: Research Data Management Support	online
May-July 2025	Module 5: Data Stewardship in Practice: Project Work	online

https://www.postgraduatecenter.at/fileadmin/user_upload/pgc/1_Weiterbildungsprogramme/Data_Steward/Downloads/Certificate_Program_Data_Steward_Uni_Vienna_20240418.pdf

各モジュールの講義・ディスカッション

Module 1 : Basics of RDM and Open Science

10月～

- 1.1 Introduction to RDM and Open Science
- 1.2 Role of Data Stewards at Research Institutions
- 1.3 Legal Framework of RDM and Open Science
- 1.4 Responsible Research Practices: Ethics and Integrity
- 1.5 Financing Models, Cost Estimation and Budgeting

Module2 : Basics of IT and Data Science

11月～1月

- 2.1 Introduction to Data Science and Data-Driven Research
- 2.2 Introduction to Machine Learning
- 2.3 Database Systems
- 2.4 Programming Basics
- 2.5 Unix Shell
- 2.6 Version Control with Git and GitLab/GitHub
- 2.7 Programming with Python

Module3 : FAIR Research Data in the Life Cycle

2月～4月

- 3.1 Project Management and the Research Funding Landscape
- 3.2 Data Management Plans and DMP Tools
- 3.3 Organizing and Structuring Data
- 3.4 Processing and Cleansing Data
- 3.5 Metadata and Documentation for Research Data
- 3.6 Repository Management and Long Term Preservation

- 3.7 Data Security, Storage Media and Storage Systems
- 3.8 Data Analysis and Visualization
- 3.9 Semantic Web, Ontologies, Linked Open Data
- 3.10 Interoperability und Data Migration
- 3.11 Persistent Identifiers
- 3.12 Reuse incl. Legal Aspects
- 3.13 Data Stewardship in the Social Sciences
- 3.14 Data Stewardship in the Humanities
- 3.15 Data Stewardship in the Natural and Life Sciences
- 3.16 Data Stewardship in the Technical Sciences

Module4 : Research Data Management Support

5月～6月

- 4.1 RDM Support and Services 1
- 4.2 Teaching Basics, Knowledge Transfer, OER
- 4.3 RDM Teaching and Training in practice
- 4.4 Needs Assessment
- 4.5 Requirements Engineering
- 4.6 RDM Support and Services (Advising) 2

Module5 : Data Stewardship in Practice - Project Work

6月～8月

DMP作成に向けた適切なステップの議論



グループ演習 2



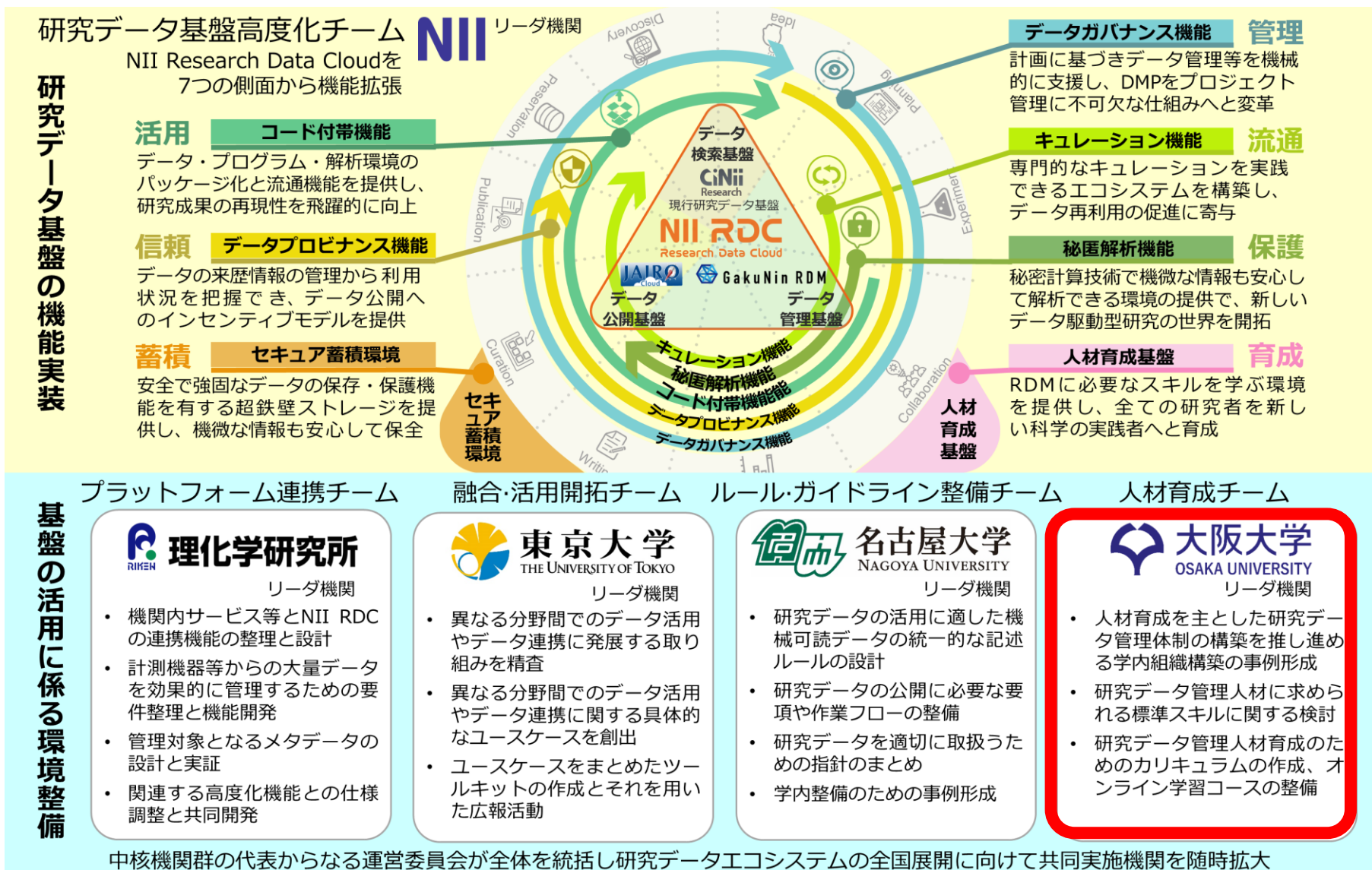
- Discuss this excerpt of an interview transcript regarding インタビュー記事の匿名化手順について議論する
- Identify potential direct and indirect identifiers
- Also discuss contextual information!
- 直接的および間接的な**識別子を特定する**
- **識別リスク**と参加者への**潜在的な危害を評価する**
- Transcript and shared notes in Moodle

After 10 minutes, we will reconvene in plenary and discuss your findings!

10分後にプレナリーセッションで再集合し、全体議論

研究データエコシステム構築と人材育成

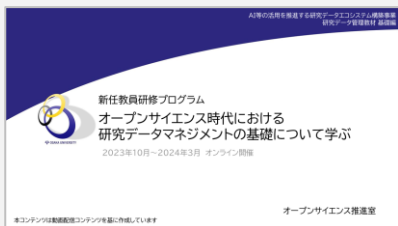
AI等の活用を推進する研究データエコシステム構築事業(2022年度～2027年度)



RDM人材育成の取り組みの全体像

- ◆ 学習教材(マイクロコンテンツ教材)の開発
- ◆ 学習教材の展開

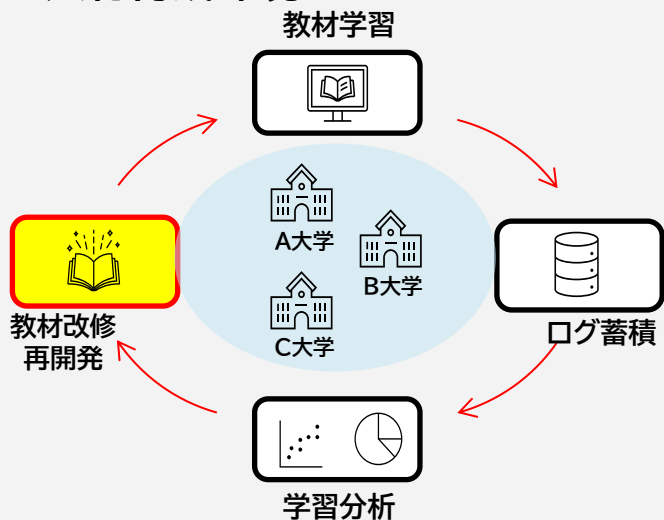
研究データ管理教材(基礎編・共通実践編)



研究データ管理教材の開発および展開

人材育成環境の水平展開

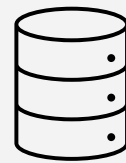
◆ 人材育成環境



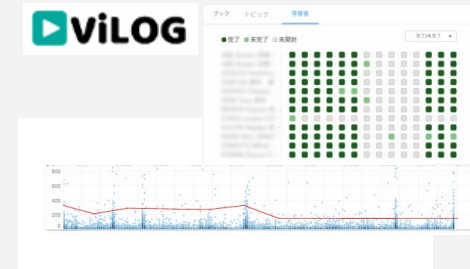
- ・ 開発コンテンツをベースに、各研究機関、コミュニティ用にアレンジして、学認LMS(機関限定コース)で構成員に提供可能に。

⇒ 一連のサイクル(教材展開、LA分析、教材再開発)を学認LMSを活用して他大学でも可能に。

- ◆ アンケート・視聴・学習ログデータの集約
- ◆ ログの可視化・学習分析
- ◆ 学習教材の改善



Learning Record Store



第一段階

第四段階

第二段階

第三段階

LA基盤のプロトタイプ構築

職種別・分野別学習教材の提供

◆ 職種別にスキルを習得可能なマイクロコンテンツの提供



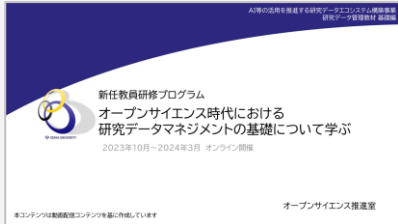
◆ 実践編教材の提供



RDM人材育成の取り組みの全体像(第一、二段階)

- ◆ 学習教材(マイクロコンテンツ教材)の開発
- ◆ 学習教材の展開

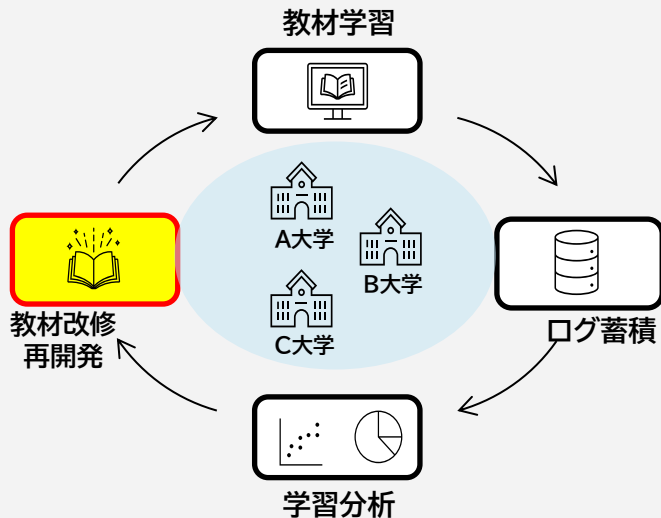
研究データ管理教材(基礎編・共通実践編)



研究データ管理教材の開発および展開

人材育成環境の水平展開

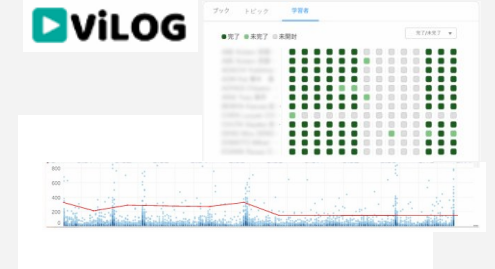
◆ 人材育成環境



- ・ 開発コンテンツをベースに、各研究機関、コミュニティ用にアレンジして、学認LMS(機関限定コース)で構成員に提供可能に。

⇒ 一連のサイクル(教材展開、LA分析、教材再開発)を学認LMSを活用して他大学でも可能に。

- ◆ アンケート・視聴・学習ログデータの集約
- ◆ ログの可視化・学習分析
- ◆ 学習教材の改善



第一段階

第二段階

LA基盤のプロトタイプ構築

第四段階

第三段階

職種別・分野別学習教材の提供

◆ 職種別にスキルを習得可能なマイクロコンテンツの提供



◆ 実践編教材の提供



RDM基礎編教材の開発

研究実施者

	研究代表者	研究分担者	学生	研究支援者
法令・規定 専門分野 ルール				
基礎編				
共通 実践編				
分野別 実践編				

構成

- 研究データマネジメントを知る
- 研究データポリシーと関係規程等
- 研究データ管理計画(DMP)
- 研究データを取得・収集および保存・共有する
- 研究データを公開する
- 研究データを利活用する

RDMサイクルに沿って背景知識を教材化

職種別の学習カリキュラム作成

学内展開(FD研修)

オープンサイエンス時代における 研究データマネジメント基礎

講師：甲斐 尚人 (D3センター 准教授)

日程：4月1日～3月31日

〈キーワード〉研究データマネジメント、オープンサイエンス、研究データ基礎、研究公正、研究データ管理計画、大阪大学研究データポリシー

〈概要〉世界的なオープンサイエンスの潮流によって、体系的かつ組織的な研究データマネジメントの重要性やそのあり方が近年注目されています。競争的資金においても、研究データ管理計画 (DMP) の作成や研究成果のオープンアクセスが求められつつあり、2025年度より新たに公募する対象研究費については、論文及び根拠データの即時オープンアクセスを義務づけるよう決定されました。このような状況を踏まえ、本研修では、オープンサイエンスの動向や本学の研究データポリシーの解説を行うとともに、研究データライフサイクルの各段階の留意点や本学の研究データ基盤整備の状況等について説明します。

〈問合せ〉研究推進部 研究企画課 研究企画係 ☐research-support@office.osaka-u.ac.jp

〈申込方法〉(事前申込不要)マイハンダイ>大学本部事務機構>研究推進関係 / About Research Promotion>
(CLE 研修) オープンサイエンス時代における研究データマネジメントの基礎について学ぶ。
受講完了には、確認問題とアンケートの回答が必須です。】



制限なし 1時間 日本語 オンデマンド

学外展開(学認LMS・OUKA・大阪大学特設サイト)

オープンサイエンス時代における研究データマネジメント基礎

ReadMore >>

大阪大学学術情報庫
The University of Osaka Institutional Knowledge Archive

オープンサイエンス時代における研究データマネジメント
大阪大学研究推進部 オープンサイエンス推進室

2023

ファイル フォーマット 利用条件 サイズ

2023_RDM_All1 pdf なし 886 KB

大阪大学オープンサイエンス推進室
研究データ管理・オープンアクセス支援

研究データ管理(RDM)基礎編動画

RDM基礎編ウェブサイト-1
RDM基礎編ウェブサイト-2

オープンサイエンス時代における
研究データマネジメント基礎

研究データポリシーと関係規程等

Fundamentals of
Research Data Management
in the Open Science Era

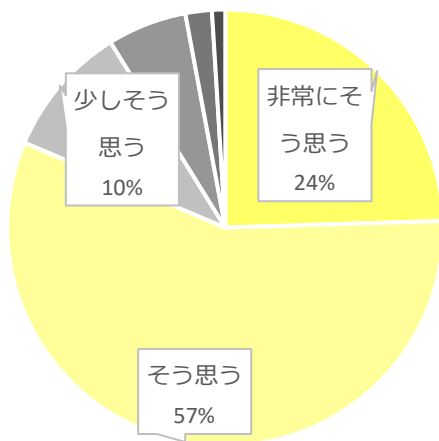
Research Data Policy and
Related Regulations

学認LMS登録 10/2時点 69機関、415人

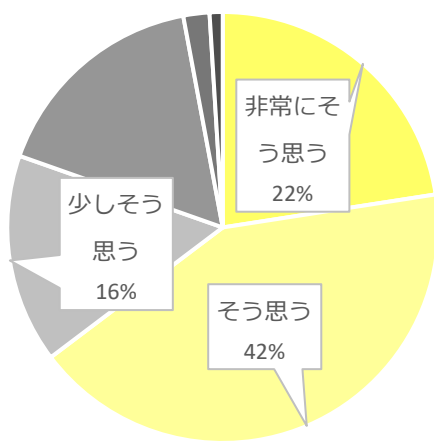
RDM基礎編教材 アンケート分析結果(2023.10～2025.9)

全体を通した評価(新任教員研修2023年度:30名、2024年度50名、2025年度:23名、計103名)

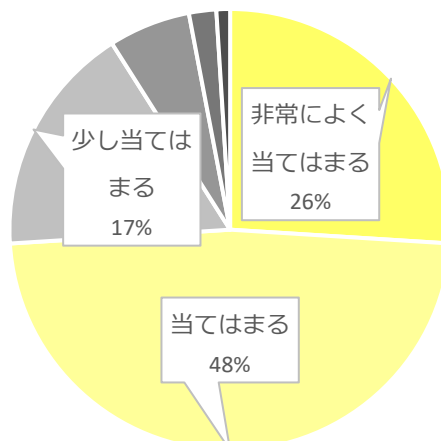
研修の難易度は適切か。



研修内容の分量は適切か。

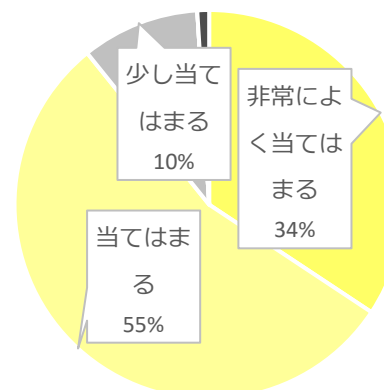


スライド内容と解説はわかりやすかったか。



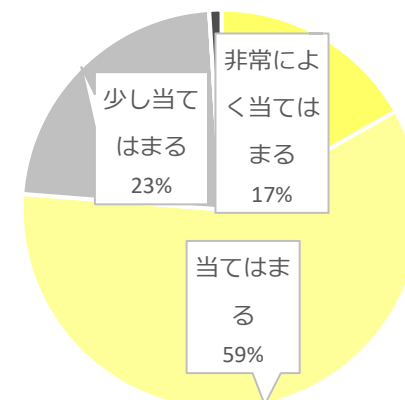
研究データマネジメントに関する理解が

深まったか。



RDMを実施するときに、その方法を理解

することができたか。



提供年度ごとの評価推移

- 難 易 度 : 3年間を通して90%前後が肯定的。
- 分 量 : 毎年「多い」と「少ない」の両方の評価が見られる。経験層差が反映されている可能性。
- わかりやすさ : 3年間を通して90%前後が肯定的。
- 理 解 度 : 否定的回答が大幅に減少。

否定的回答(少し当てはまるを含む)は 2023年0% → 2024年18% → 2025年 8%

- 方 法 理 解 : 「非常に」割合の限定的伸び:20%(2023) → 18%(2024) → 9%(2025)

→ 伸び代が残存。具体例の追加が望まれる。

JPCOARとの協働(読上げテキスト改善)による効果が考えられる

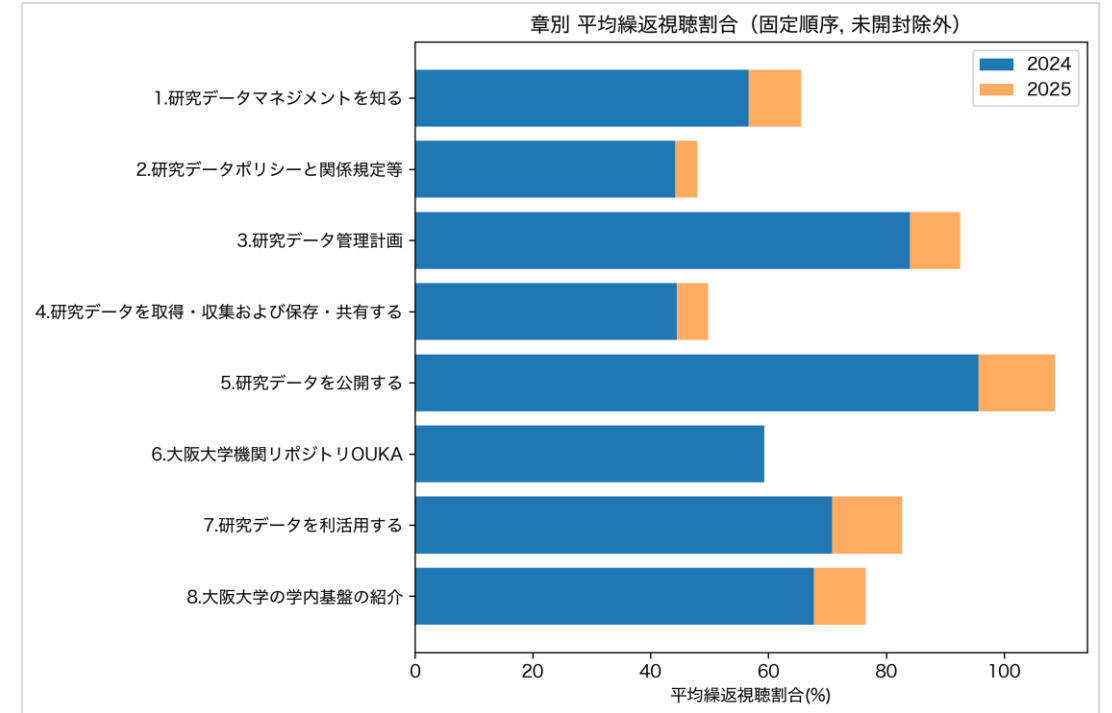
九州大学との協働(解説内容の補強)による効果の可能性が考えられる

RDM基礎編 アンケート・視聴ログ分析(2023.10～2025.9)

アンケート分析

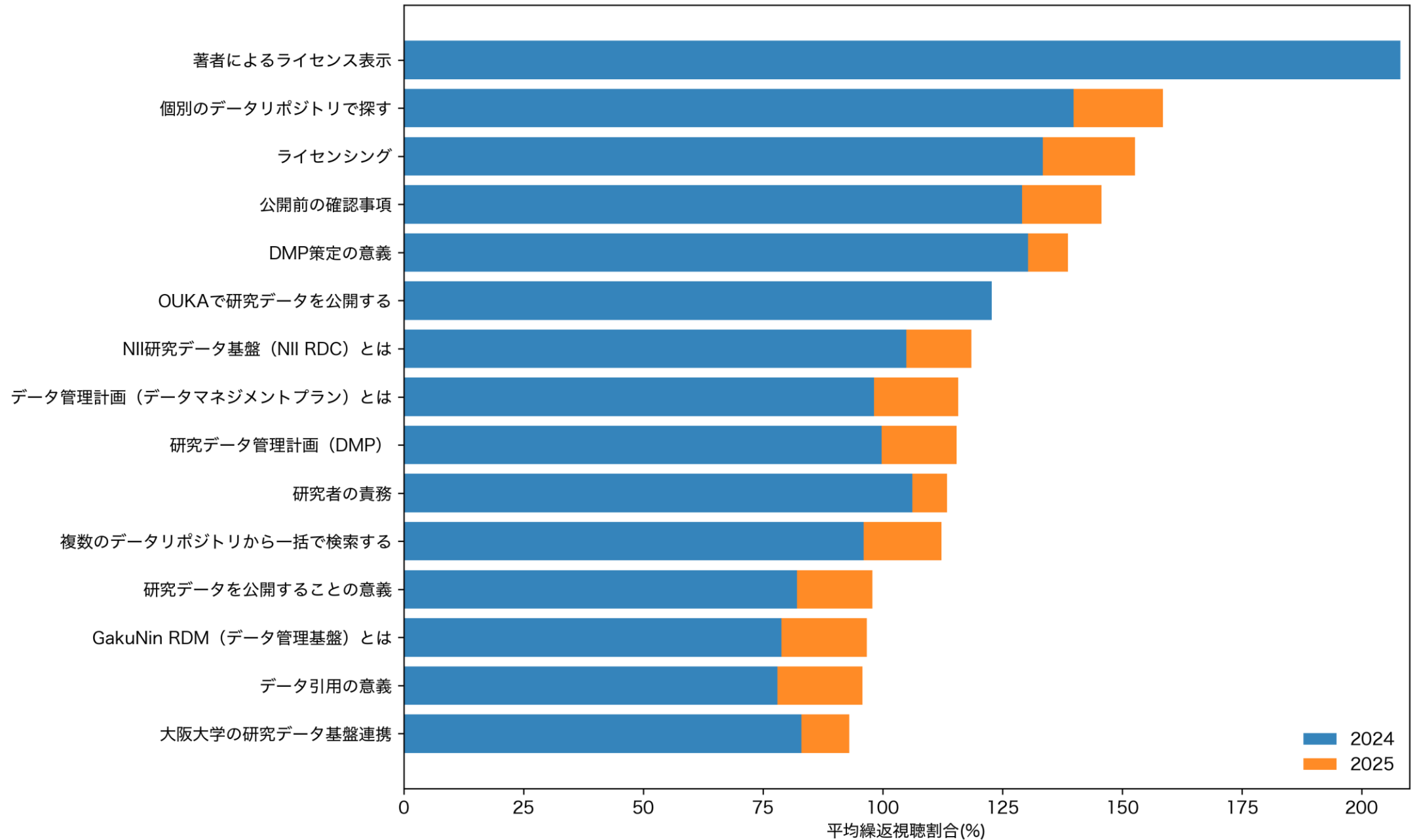
Q. どの講義が特に役立つ(あるいは役立ちそう)か 選択してください。	2023	2024	2025	計
1.研究データマネジメントを知る	6	10	8	24
2.研究データポリシーと関係規定等	4	7	1	12
3.研究データ管理計画	9	13	6	28
4.研究データを取得・収集および保存・共有する	7	19	8	34
5.研究データを公開する	10	13	3	26
6.大阪大学機関リポジトリOUKA	9	13	—	22
7.研究データを利活用する	9	11	5	25
8.大阪大学の学内基盤の紹介	11	12	8	23

視聴ログ分析(簡易的)



- 2024年度:繰返視聴は全体で65%
- 2025年度:繰返視聴は全体でほぼ9%前後
→ 音声・説明の改善による影響の可能性。
一方で、それでも繰り返し視聴が残る講義・トピックは、アンケート結果と概ね一致する傾向に。

Open Science：トピック別 平均繰返視聴割合（上位15件・全データ対象）



アンケート結果を受けて改修した教材でセミナーを実施

文部科学省「世界で活躍できる研究者育成プログラム総合支援事業」研究者のための+αシリーズVol.35（2025年7月17日）
『Research Data Management for the Open Science Era ～いま考えるべき研究データマネジメントのかたち～』

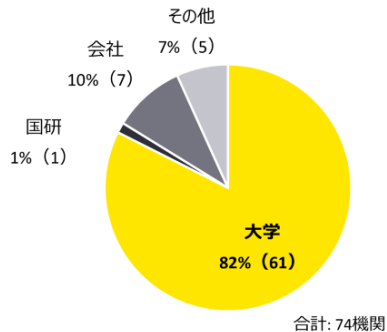
改修(特に「3.研究データ管理計画」「5.研究データを公開する」)を実施したことで受講者から高い評価
⇒ 学認LMS上の教材も更新予定(2025年度末)

+αシリーズvol.35のアンケート結果

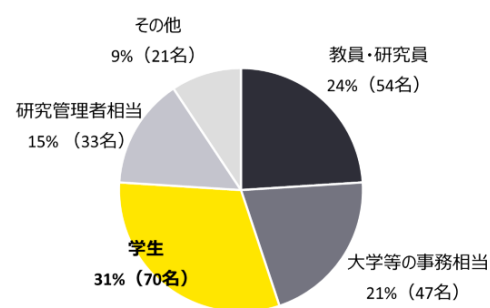
7/17(木)に甲斐先生にご講演いただいた+αシリーズvol.35は、当日156名に参加いただきました。

申込者数 225名 → 当日参加者数 156名

申込者の所属機関



申込者の職位



+αシリーズvol.35のアンケート結果

74の所属機関から225名にお申込みいただき、当日は156名に参加いただきました。
ウェビナー内容についても「満足」以上の評価が93%を占め、大好評を得ました

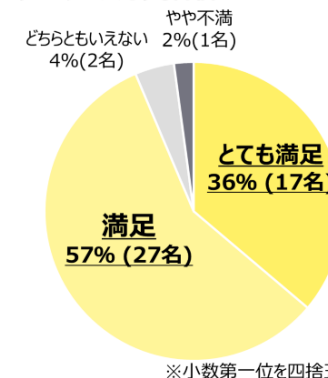
申込者数 225名

申込機関数 74

ライブ参加者数 156名

アンケート回答者数 47名

ウェビナーに対する評価



自由記述でいただいたご意見（抜粋）

Q. 満足である理由
現場で生じる具体例を活用しながらのQ&Aがいくつも示されており、非常に身近で当事者意識を感じさせられる講演でした。
知らなかった情報を知ることができた。具体例をあげて頂いて良かった。質疑応答の時間が十分にあって良かった。
研究データ管理を行うための流れや留意すべきポイントについて、詳しくご説明いただき、大変良かったです。
分かりやすい資料と説明で、研究データについて、また、そのマネジメントについて知ることが出来たためです。本学はリボトリの運営もこれからという、かなり出遅れた状態ですが、今後は何を意識していくべきかが分かりました。
The introduction is easier for me to understand.
データマネジメントのコンセプト、世界の動向、役に立ちそうなリンクなどを知ることができた。
講演者の話が大変具体的に明確だったため、業務のヒントをたくさん得ることができた。
公開データベースについて検討中のため、大変勉強になりました。
良くまとまった講義で大変ありがたかったが、結果として現場の問題が解決するわけではないため、とても満足したとは答えづらい。講義やウェビナー自体の問題ではなく、トピック自体が現在進行系の課題で将来が見えない（理想像がステークホルダーの中でも共有できていない）のが問題ではないかと思っています。
Q. 不満である理由/運営や進行に関する気づき・改善点
The English translation was fine, but it would have been better for me if the seminar was in English.
資料が手元にあれば、メモなど書き込めて助かります。
演者の先生のウェブカメラの設定をクロマキーにして、背景も無くすと、スライドが見やすいと感じました。
Q. 今後+αシリーズで取り上げてほしいテーマ
オープンサイエンス・オープンアクセスの国内外の動向・対応策（選択式、32票）
「AI等を活用する研究データエコシステム構築事業（人材育成）」の取組成果（選択式、23票）
各分野別のRDM人材育成（選択式、17票）
国際連携（選択式、14票）
どうやって「人の上に立つ人」になる練習をすれば良いか（自由記述）
国際共同研究におけるデータの越境移転について（自由記述）

アンケート結果を受けて改修した教材でセミナーを実施

文部科学省「世界で活躍できる研究者育成プログラム総合支援事業」研究者のための+αシリーズVol.35（2025年7月17日）
『Research Data Management for the Open Science Era ～いま考えるべき研究データマネジメントのかたち～』

改修(特に「3.研究データ管理計画」「5.研究データを公開する」)を実施したことで受講者から高い評価
⇒ 学認LMS上の教材も更新予定(2025年度末)

+αシリーズvol.35のアンケート結果

7/17(木)に甲斐先生にご講演いただいた+αシリーズvol.35は、当日156名に参加いただきました。

申込者数 225名 → 当日参加者数 156名

申込者の所属機関



申込者の職位



合計: 74機関

+αシリーズvol.35のアンケート結果

74の所属機関から225名にお申込みいただき、当日は156名に参加いただきました。
ウェビナー内容についても「満足」以上の評価が93%を占め、大好評を得ました

申込者数 225名

申込機関数 74

ライブ参加者数 156名

アンケート回答者数 47名

自由記述でいただいたご意見（抜粋）

Q. 満足である理由

現場で生じる具体例を活用しながらのQ&Aがいくつも示されており、非常に身近で当事者意識を感じさせられる講演でした。
知らなかった情報を知ることができた。具体例をあげて頂いて良かった。質疑応答の時間が十分にあって良かった。
研究データ管理を行うための流れや留意すべきポイントについて、詳しくご説明いただき、大変良くわかりました。
分かりやすい資料と説明で、研究データについて、また、そのマネジメントについて知ることが出来たためです。本学はリポトリの運営もこれからという、かなり出遅れた状態ですが、今後は何を意識していくべきかが分かりました。
The introduction is easier for me to understand.

満足したとは答えづらい。
がステークホルダーの中で

現場で生じる具体例を活用しながらのQ&Aがいくつも示されており、非常に身近で当事者意識を感じさせられる講演でした。
知らなかった情報を知ることができた。具体例をあげて頂いて良かった。質疑応答の時間が十分にあって良かった。

Q. 不満である理由/運営や進行に関する気づき・改善点

The English translation was fine, but it would have been better for me if the seminar was in English.
資料が手元にあれば、メモなど書き込めて助かります。
演者の先生のウェブカメラの設定をクロマキーにして、背景も無くすと、スライドが見やすいと感じました。

Q. 今後+αシリーズで取り上げてほしいテーマ

オープンサイエンス・オープンアクセスの国内外の動向・対応策（選択式、32票）
「AI等を活用する研究データエコシステム構築事業（人材育成）」の取組成果（選択式、23票）
各分野別のRDM人材育成（選択式、17票）
国際連携（選択式、14票）
どうやって「人の上に立つ人」になる練習をすれば良いか（自由記述）
国際共同研究におけるデータの越境移転について（自由記述）

※小数第一位を四捨五入

アンケート結果を受けて改修した教材でセミナーを実施

追加したスライド例(国内の最新動向、DMPに関するQA、メタデータ管理の実例)

「学術論文等の即時 オープンアクセスの実現に向けた基本方針」への対応方法

対象となる競争的研究費(現時点)

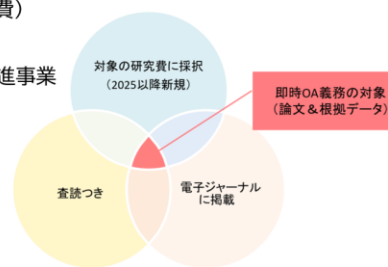
- 日本学術振興会(JSPS)/科学研究費助成事業(科研費)
- 科学技術振興機構(JST)/戦略的創造研究推進事業
- 日本医療研究開発機構(AMED)/戦略的創造研究推進事業
- 科学技術振興機構(JST)/創発的研究支援事業

即時オープンアクセスが義務付けられる研究成果

- 査読付き電子ジャーナルに掲載された学術論文(著者最終稿を含む)
- 論文の根拠データ

対応方法

原則として所属機関の機関リポジトリで公開(グリーンOA)



内閣府公開資料

適用時期

2025
※202

Q. 最低限押さえるべき項目は何か

DMP作成必須の研究助成金ではないし、忙しい。。

最低限押さえるべき要素は何か。DMPがのちのち一番役に立つ教育現場を想い、研究チームに学生が複数入っていて、修士課程の学生の研究成果であるデータを持っていて、〇〇…

「データ散逸を防ぐ」という観点で言えば、最低限押さえるべき項目が見えてくる

項目	記録
① 研究データの種類と保存先	CSVデータ、画像データをONIONに保存
② データ公開・共有の計画	論文発表後6か月以内にZenodoで公開
③ データ管理の責任者	阪大太郎(大阪大学)

データ保管の責任者はだれか…

Q. DMPの内容を途中で変更する

変更内容は研究チーム内で共有し、適切に記録(更新例)

- 研究の進捗に応じてデータの保存場所を変更
- 新たなデータ収集手法の導入したとき
- 保存場所が突然利用不可になった場合のデータの保存・共有ポリシーを変更したとき
- 管理者や関係者の連絡先情報の更新が必要

ステップ	
① 変更内容を明確にする	「データの保存場所」など、変更
② 変更履歴を記録する	更新日と変更点(存在を更新)
③ 今後の更新計画を策定する	四半期ごとにDMPを見直し、研究メンバーと合意形成

「研究データ管理計画(DMP)とは 研究計画とデータマネジメント(学習編)」, 大阪大学オープンサイエンス推進室研究データ管理・オープンアクセス支援, <https://osoa-portal.osaka-u.ac.jp/data-management/dmp-what/>

Q. データ公開をしたくない場合、どのような選択肢があるか?

センシティブデータや特許申請、論文発表準備など、一定期間データを非公開にする必要がある場合、以下の3つの方法を検討する

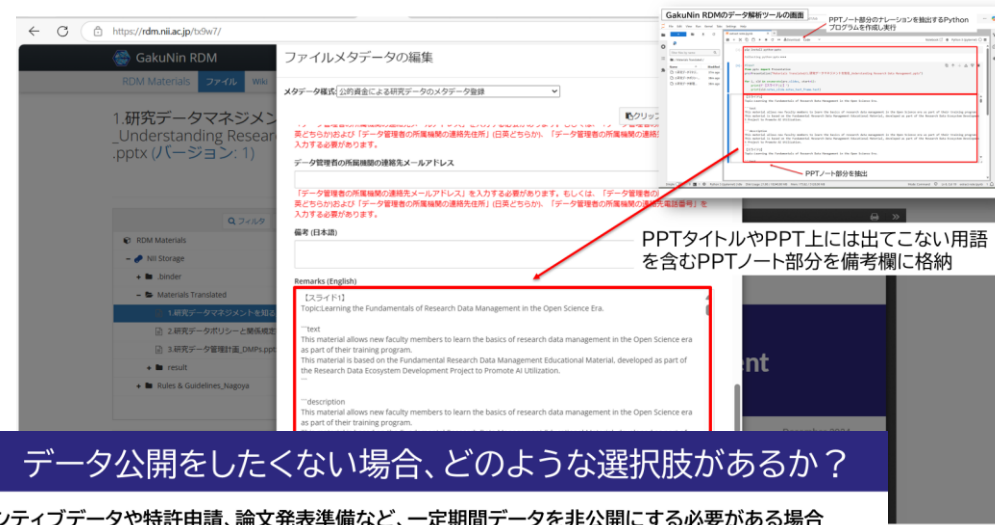
方法	詳細
① エンバゴ期間を設定	「論文発表後12か月間非公開(特許申請中)」など、一定期間データを公開せずに保留する。
② 限定公開(アクセス制限)	「共同研究者のみにデータ共有」「機関リポジトリで学内限定公開」など、アクセス制限を設定する。
③ メタデータのみ公開	データ本体は非公開とし、データの概要(メタデータ)だけを公開することで研究の透明性を確保する。

AMED 研究データ利用に係るガイドライン2.1 版
「AMEDからの支援(委託又は補助)を受けた研究開発の成果として生み出されるデータには、患者の個人情報が含まれることがあり、関係法令、倫理指針等に基づく個人情報の保護やプライバシーの保護を含めた、適切なデータのシェアリングを実施しなければならない。」
「各大学・研究機関・企業等による研究開発のインセンティブや国益を保護」という観点からは、一部の研究開発データについては少なくとも一定期間はデータシェアリングを行わないことを認めることも、オープン・アンド・クローズ戦略の観点から重要である。」
【例外猶予期間】～省略

科学研究費助成事業データマネジメントプラン(DMP)【作成上の注意】

「5. 「機微情報がある場合の取り扱い方針」欄には、データの保存や共有に関する同意、匿名化処理、センシティブデータの扱い等を記入すること。」

日本学術振興会「科学研究費助成事業データマネジメントプラン(DMP)【作成上の注意】」, https://www.jsps.go.jp/file/storage/kaken_01_10_datamanagement/dmp_chui.pdf
日本医療研究開発機構(2023, 10, 16)AMEDにおける研究開発データの取扱いに関する基本方針, AMED研究データ利用に係るガイドライン、データマネジメントプラン」
<https://www.amed.go.jp/koubo/datamanagement.html>



今後の取り組み(基礎編)

➤ 職種別最適化(パーソナライズ学習)

学習前の事前テスト結果から弱点部分を特定し、受講者個別に教材トピックを提示

➤ 様々なプラットフォームを通じた展開

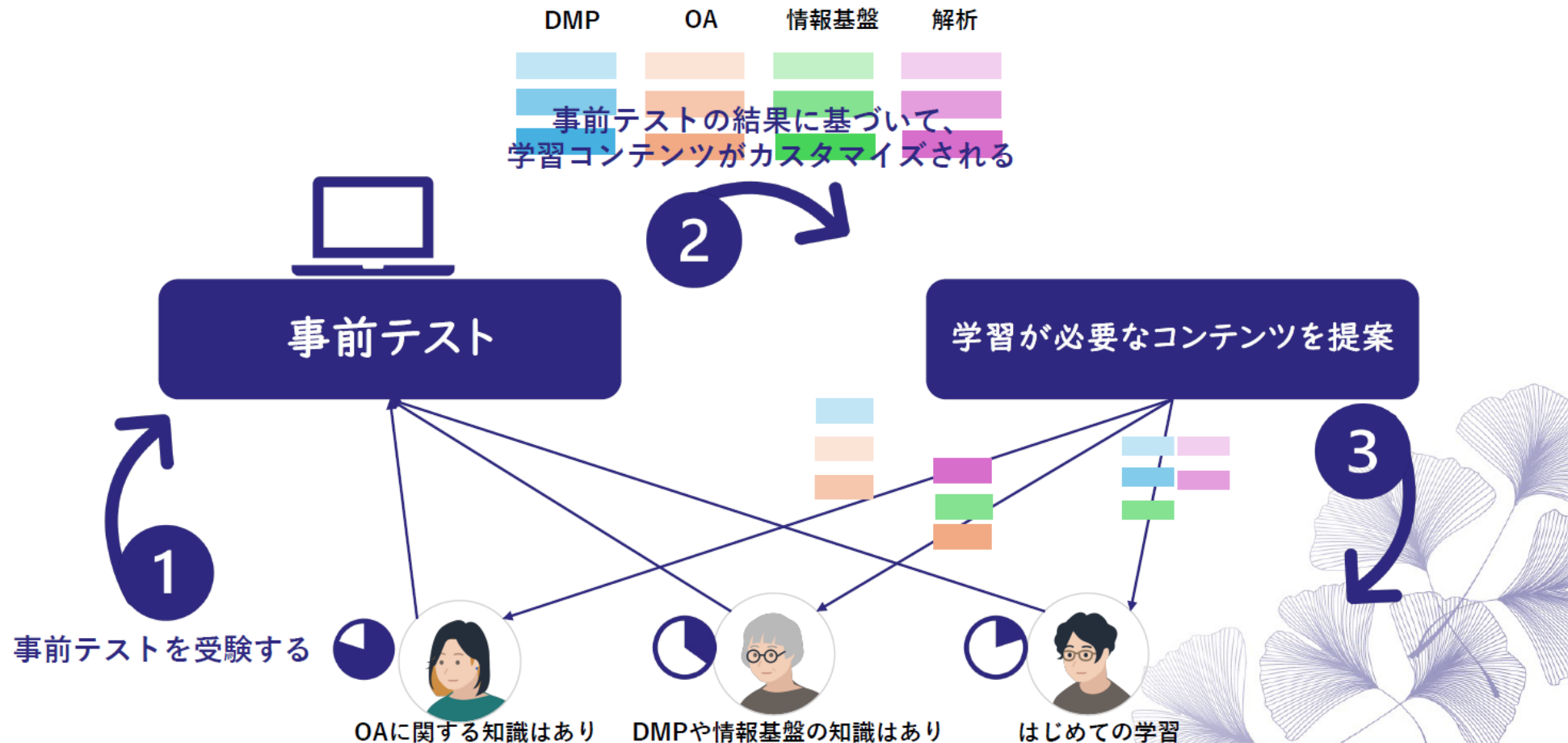
各研究機関の環境に合わせて導入できるように教材を提供

(2025年10月2日時点)

運用機関	公開プラットフォーム	受講者数・アクセス件数
NII	学認LMS	計415名(69機関)
JPCOAR	JPCOARリポジトリ	計2,897件(2024.12.9～)
大阪大学	CLE(大阪大学e-learning) ※新任教員研修(選択科目)	計103名 内訳 23名(2025年度) 50名(2024年度) 30名(2023年度)
	機関リポジトリOUKA	計1,332件 内訳 809件(2023.10.1～) 523件(2024.12.9～ ※改修版)

今後の取り組み(基礎編)

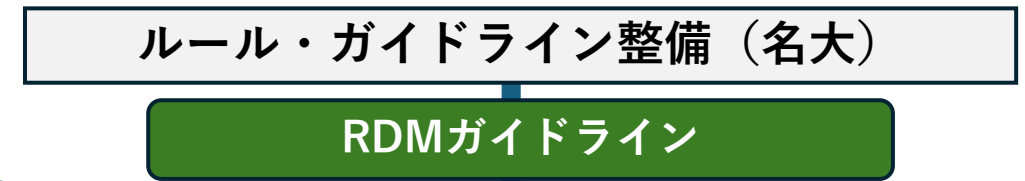
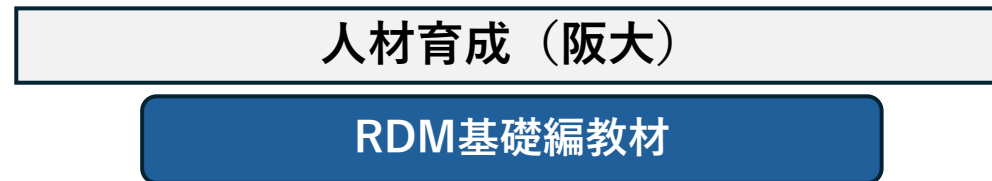
個別最適化システムのイメージ



今後の取り組み(基礎編)

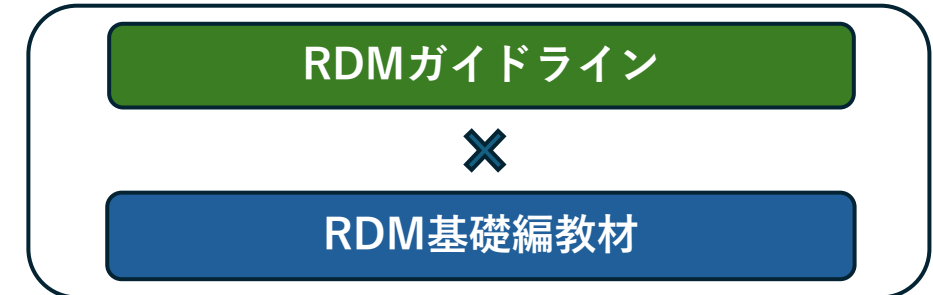
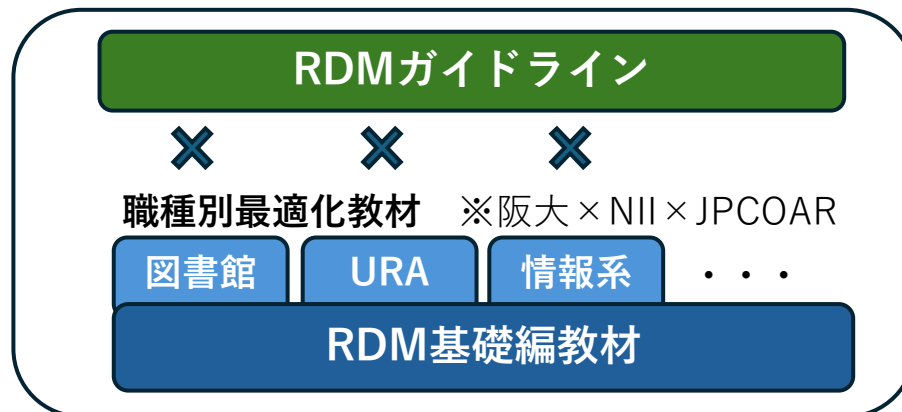
➤ 受講の動機づけの強化

- 学認LMSでオープンバッジ付与
※学認LMSで65機関・382名が受講中・受講済み(9/17時点)
- ルール・ガイドライン整備チームとの連携

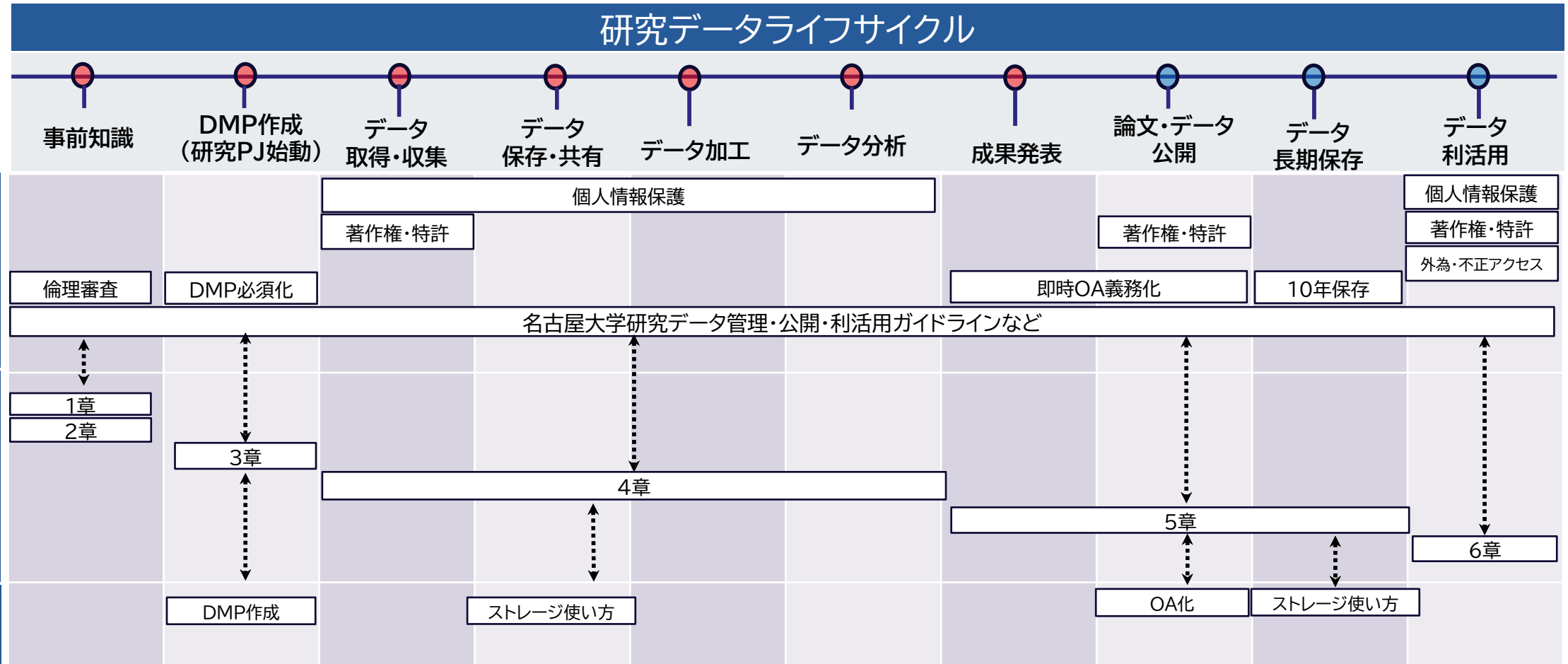


職種別最適化教材とガイドラインの紐付け
各職種の支援人材が、教材で学習する際に、
どの法令・ガイドライン項目が根拠となっ
ているか確認できる

ガイドラインと基礎編教材の紐付け
ガイドラインに紐づいた教材で学習することができる



ルール・ガイドライン整備チームとの連携



RDM共通実践編(OA・DMP)の開発

研究実施者

	研究代表者	研究分担者	学生	研究支援者
法令・規定 専門分野 ルール				
基礎編				
共通 実践編				
分野別 実践編				

「オープンアクセスを巡る状況と大阪大学におけるオープンアクセス支援」構成

- オープンアクセスの方法
- オープンアクセス出版とAPC など

「研究データ管理計画(DMP)とは 研究計画とデータマネジメント〈学習編〉」構成

- 研究データ管理とDMPの関係
- 研究データ管理計画(DMP)を作成時にポイント など

学内展開(OA:FD研修)

オープンアクセスを巡る状況と大阪大学におけるオープンアクセス支援

講師：図書館職員

6月2日～3月31日

〈キーワード〉オープンアクセス、論文掲載料、転換契約、租悪学術誌・ハゲタ

〈概要〉電子ジャーナルの価格高騰、論文掲載料 (APC) を必要とする学術誌 (いわゆるハゲタカジャーナル) の出現など、大きく変化するオープンアクセスを巡る動向を学びます。加えて、大阪大学におけるオープン

《問合せ先》附属図書館 図書館企画課 企画係 ☐ tosyoko-kikaku-kikaku@

《申込方法》事前申込不要・大阪大学 CLE にて動画を配信します。受講後所定のフォームから受講報告をしていただきます。

新任教員研修プログラム
オープンアクセスを巡る状況と
大阪大学におけるオープンアクセス支援

大阪大学附属図書館 学術情報整備課
電子コンテンツ担当

学外展開(大阪大学特設サイト)

研究データ管理計画(DMP)とは

研究計画とデータマネジメント〈学習編〉

「研究プロジェクト等における研究データの取り扱いを定めるものであり、具体的にはデータの種類、フォーマット、アクセス及び共有の計画に関する計画などについて記載されるもの。」

引用：文部科学省科学技術・学術審議会学術分科会学術情報委員会(2016、2、26)「学術情報のオープン化の推進について」(審議要旨)

日本学術振興会 科学研究費助成事業(科研費)

科研費における研究データの管理・利活用等について

- 「科研費での研究の実施にあたっては、研究データの管理計画であるデータマネジメントプラン(DMP)を活用し、研究データの適切な管理や利活用の促進に努めていただきます。」
- 「研究者は、オープン・アンド・クローズ戦略に従いDMPを策定し、それに基づいてデータの公開・共有を行ってください。」
- 科学研究費助成事業データマネジメントプラン(DMP)(作成上の注意)

日本医療研究開発機構 戦略的創造研究推進事業(革新的先端研究開発支援事業)

AMEDにおける研究開発データの取扱いに関する基本方針、AMED研究データ利活用に係るガイドライン、データマネジメントプラン

- 「(「省経」研究開発データの種類、保存場所等、データの管理責任者、データシェアリングその他のデータ利活用の方針等を記載する「データマネジメントプラン(DMP)」(以下、「DMP」という。))を委託研究開発契約等の締結時に提出することを義務化している。」
- 「DMPには、AMEDが委託者となる委託研究開発契約等において、どのようなデータが創出、取得又は収集され、誰がどこに保有しているのかを記載することが求められる。」
- AMED 研究データ利活用に係るガイドライン2.1 版

研究データのライフサイクル

研究データのライフサイクル

研究データの取扱い計画の策定

研究データの取扱い

研究データの取扱い

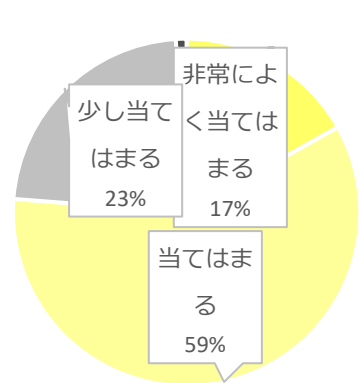
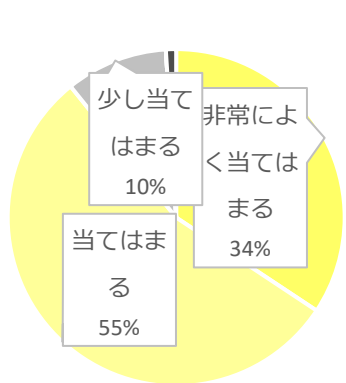
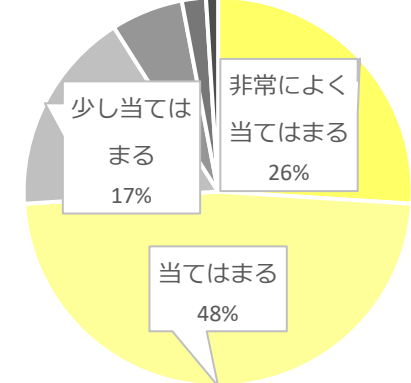
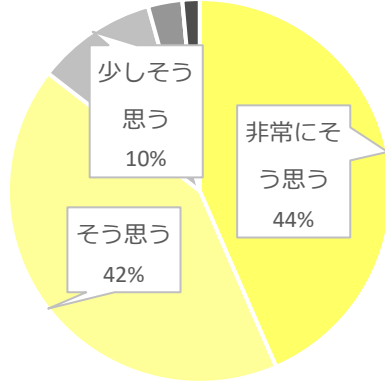
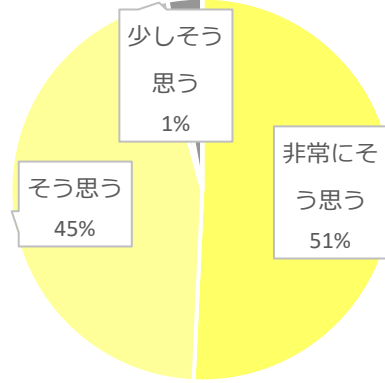
出典：大阪大学研究推進本部オープンサイエンス推進室、「3. 研究データ管理計画(DMP)」, オープンサイエンス時代における研究データについて学ぶ

研究データ管理とDMPの関係

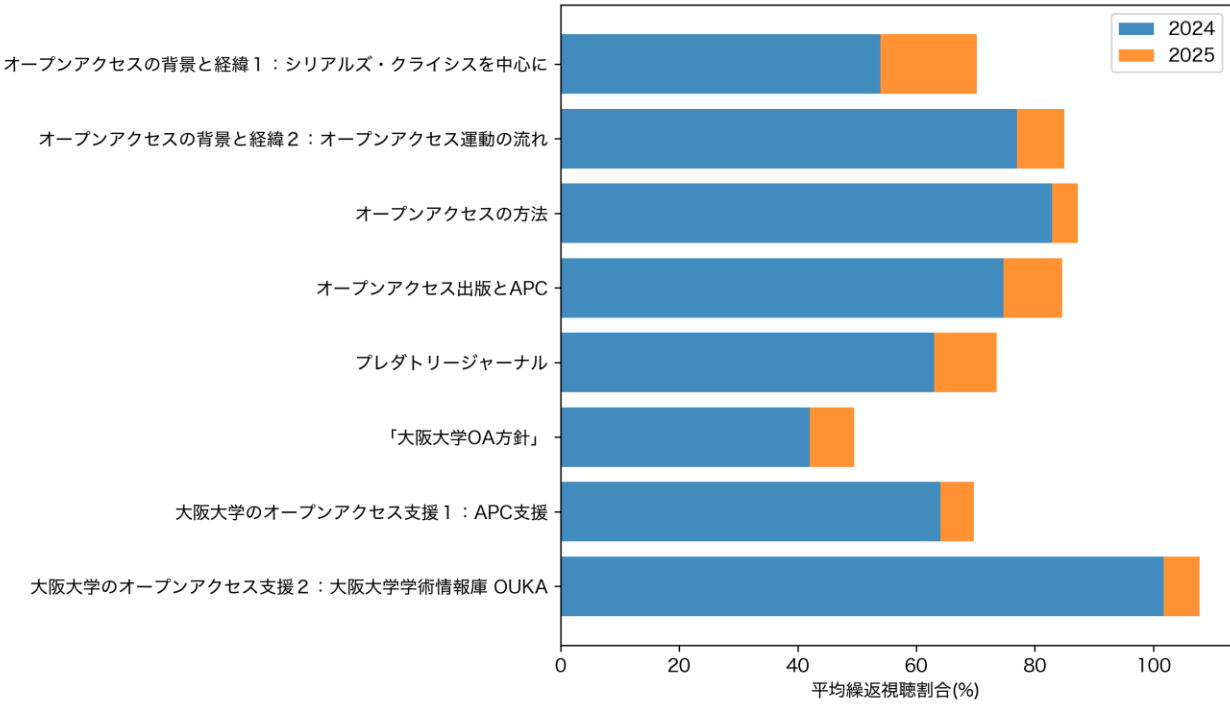
RDM共通実践編(OA)教材 アンケート分析結果(2023.10～2025.9)

全体を通した評価(新任教員研修2023年度:43名、2024年度29名、2025年度:10名、計82名)

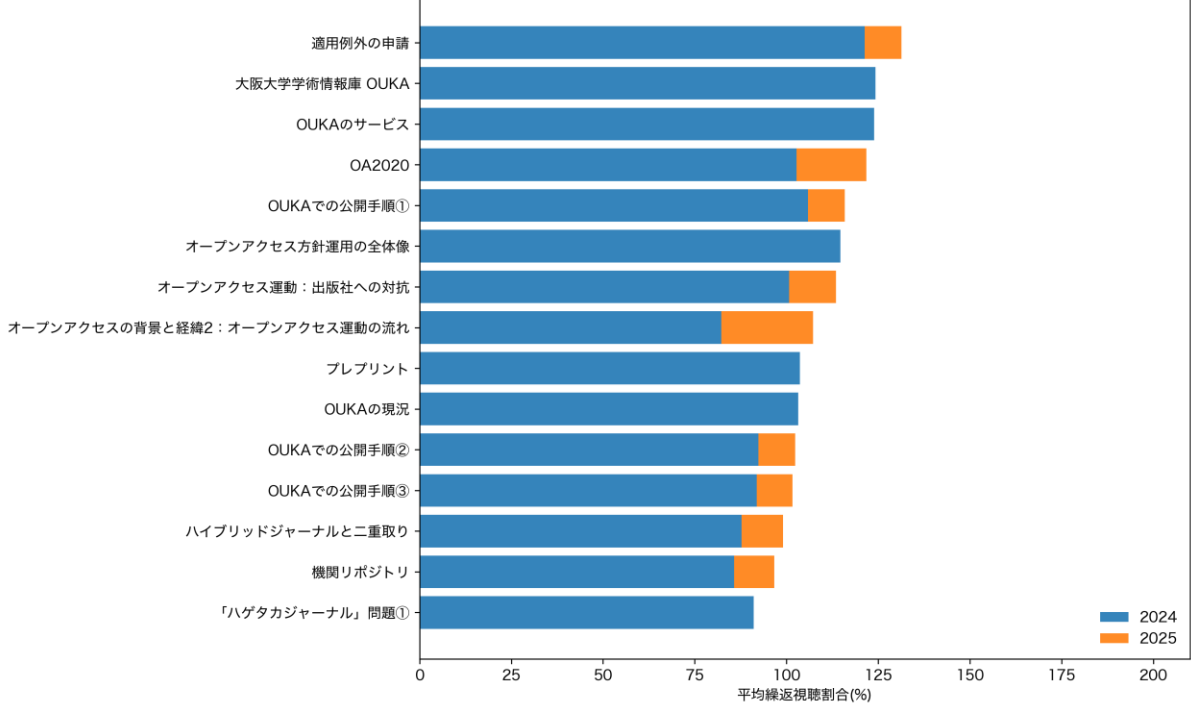
研修の難易度は適切か。 研修内容の分量は適切か。 スライド内容と解説はわかりやすかったか。 研究データマネジメントに関する理解が深まったか。 RDMを実施するときに、その方法を理解することができたか。



章別 平均繰返視聴割合 (Open Access/未開封除外)



Open Access : トピック別 平均繰返視聴割合 (上位15件・全データ対象)



RDM共通実践編（Python活用基礎研修）の実施

背景

研究現場のデータは多様であり、クリーニング・整形・処理の段階でPythonが使用されることが多い。
研究データライフサイクルの各段階の研究支援人材にも、以下の理解は重要である。

- データ品質確保や再現可能性の考え方の理解
- 研究者の技術的な処理に対する最低限の理解

研修の目的

Pythonを用いたデータ処理の基礎を通じて、研究支援人材が研究データの品質確保や共有・再利用を理解するために必要な基礎知識を身につけ、研究者の技術的な処理内容に対して理解を示せるようになる

■ 産業科学研究所AIセンター 木村先生・山中技術専門職員 作成教材より

Python活用基礎研修について

研修の目標

- Pythonを通してプログラミングの基礎を学ぶ.
- 実際に手を動かして簡単なデータ解析およびAI（機械学習）を体験する.

入門編

- 入門編1: Pythonプログラミングの基本的なルールを学ぶ.
- 入門編2: NumPyを用いたプログラミングを学ぶ.

応用編: 各種モジュール（＝便利なツール）の使い方を学ぶ

- 応用編1（データ解析）: pandas, Matplotlib
- 応用編2（AI, 機械学習）: scikit-learn

主催：附属図書館研究開発室

共催：産業科学研究所 AI センター、コアファシリティ機構
情報推進部、D3センター

協力：技術職員連絡会議

部局横断型女性技術職員ネットワーク

産業科学研究所技術室

研修構成とRDMへの接続

区分	主な内容	RDMとの関係
入門編1	Pythonの基本文法と制御構造	再現可能な処理の基礎を理解
入門編2	NumPyによる数値計算と配列処理	データクレンジングと品質管理の考え方を理解
応用編1	pandas・Matplotlibによるデータ解析	可視化・メタデータ生成による品質保証の理解
応用編2	scikit-learnによる機械学習入門	データ利活用・AI応用の基礎概念を理解

研究データに関わる
研究・教育支援人材向け

Python 活用基礎研修（導入）

附属図書館 研究開発室
甲斐 尚人・神崎 隼人

主催：附属図書館研究開発室
共催：産業科学研究所 AI センター
コアファシリティ機構
(データ利活用 DX 支援部門・研究支援人材育成部門)
情報推進部
サイバーメディアセンター
協力：技術職員連絡会議
部局横断型女性技術職員ネットワーク
産業科学研究所技術室

2024年3月15日

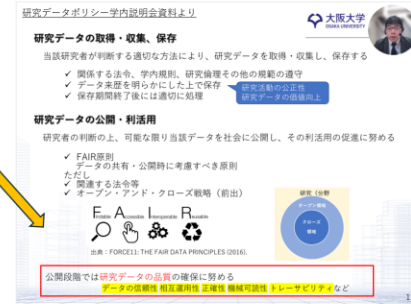
研究データの管理の観点から

大阪大学研究データポリシー

3. 研究者の責務

3.2 研究データの公開・利活用

～中略～また、公開にあたっては、利活用を促進するために**研究データの品質の確保**に努めなければならない。



✓ クリーニングされたデータと適切なデータ管理は、研究の再現性とデータの再利用性を確保

データクリーニング・処理ツール

Other Options

- Excel or Google Sheets
- Python (with Pandas, OpenRefine API etc.)
- R (e.g. with RStudio)
- SQL
- chatGPT, Gemini ... LLMs



データクリーニング・処理ツール



研究データの品質確保（クリーニング・処理）

Types of Error

- Standardization and Formatting** (spaces, dates, strings, ...)
- Missing values** (empty cells, unwanted rows, ...)
- Bad values** (person is 200 years old, the price of a carrot is 280 €, ...)
- Duplicates**
- Invalid characters and different encoding** ("ß" → "â-ë")
- Invalid data according to a schema**

入門編(1・2)Python基礎と数値処理 — 再現可能な処理の理解

- 研究データの品質や再現性は、「どう処理されたか」の記録に大きく依存
- ところが、研究者の多くはその処理をExcelやスクリプトで行い、「なぜその操作をしたのか」が暗黙知(implicit knowledge)として残りがち。
- 支援者がこの処理の構造や考え方(例: 欠損値を除外した理由、閾値設定の根拠など)を理解していれば、データ管理計画(DMP)や共有時のメタデータ説明・品質保証を支援できる可能性







研究者の操作	Pythonによる処理	支援者が得る知識
データをフィルタして不要な行を削除	if文・条件指定で処理を制御	・研究者が行うデータ整形・前処理の基本構造を理解できる 例えば、「どの条件でデータを除外しているのか」を説明できる
複数ファイルを統合	for文・関数で繰り返し処理	・データクレンジングや加工の再現可能性の重要性を把握できる 例えば、「結合時に整合性をどう担保しているか」を理解できる
数値を正規化・平均化	NumPy配列の演算	・処理ルールをコードベースで説明・理解できる視点を獲得 例えば、「統計処理の意味や再現性」を把握できる

応用編(1・2)データ解析とAI応用 — 品質保証と利活用の理解

- データ解析や可視化、AIによる分析は、研究データの品質保証と再利用性の基盤となる。
- 研究支援人材がこれらの処理の構造を理解していれば、品質検証・メタデータ生成・派生データ管理といったRDM後半段階の支援が可能になる。

研究者の操作	Pythonによる処理	支援者が得る知識
データを整形・集計して傾向を把握	pandasによるデータフレーム操作(集計・整形・統計計算)	研究者が行う分析処理の構造を理解する 例えば「どのような基準でデータを集計しているか」を説明できる。
データを可視化して傾向を検証	Matplotlibによる可視化(折れ線・棒・散布図など)	可視化が品質検証(異常値検出や傾向確認)に果たす役割を理解する 例えば、「再現可能な分析手順の重要性」を把握できる。
モデルを作成して予測・分類	scikit-learnによるクラスタリング・回帰・分類	モデルを再利用可能な成果(派生データ)として捉える 例えば、「分析工程を記録・説明できる視点」を得る。

今後の取り組み(実践編)

データタイプ	代表的 対象分野	教材内容	     						教材展開			展開実績	応用が期待 される分野
			背景	DMP	取得 ・収集	保存 ・共有	加工 ・分析	公開 ・利活用	学内	学外	ワーク ショップ		
実験データ (画像・テキスト)	測定科学 (化学) 開発済み	測定データの取 得・保存・共有	基礎編・共通実践編(DMP・OA)		◎	◎			公開中	公開中	—		理工系 医歯薬・生命系
テキストデータ	質的社会科学 (フィールドワーク) 開発済み	参与観察(エスノグ ラフィ)によるデー タの取得・収集お よび保存・共有			◎	○			今年度 公開予定	今年度 公開予定	来年度 開催予定	・リポジトリアクセ ス数(156件) ※学会報告資料	社会科学 (社会学・法学・心 理学・教育学)
	デジタル・ヒュー マニティーズ (特別コレクション) 開発済み	TEI技術によるテ キストのアノテー ション・分析					◎		公開中	公開中	来年度 実施に 向けて 計画中	・リポジトリアクセ ス数(251件) ・CLE受講者数 (34名)	人文学 (歴史・哲学・言語・ 文学・言語学)
画像データ	デジタル・ヒュー マニティーズ (特別コレクション) 開発済み	IIIF規格による高 精細画像化および 公開・利活用			○	◎		◎	公開中	公開中		・リポジトリアクセ ス数(1,124件) ・CLE受講者(94 名)	人文学 (歴史・哲学)
WEBデータ	デジタル人類学 今年度開発	スクレイピング技 術等による画像・ テキストの取得・収 集および加工分析			◎		◎		来年度 公開予定	来年度 公開予定		—	社会科学 (社会学・心理学・ 教育学)
統計データ・ 位置データ (ビッグデータ)	量的社会科学 (統計学) 準備中				◎		◎		—	—	—		社会科学 (経済学・地理学)

大阪大学オープンサイエンス推進室 研究データ管理・オープンアクセス支援

トップページ

オープンサイエンス推進の理念と取組全体を紹介し、研究データ管理・公開支援への入口となる導入ページ。



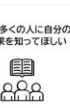
研究者のみならず、例えば、こんな悩みはありませんか？

01



学術誌はオープンアクセス料が高い！

02



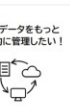
もっと多くの人に自分の研究成果を知ってほしい！

03



なかなか思ったように研究費が得られない！

04



研究データをもっと効率的に管理したい！

その悩み、実は研究データ管理・オープンアクセスの実践によって解決できます！

01

OUKA(大阪大学学術情報庫)なら、無料でオープンアクセス！
学術誌でのオープンアクセスにはAPCの支払いが必要ですが、OUKAなら著者の費用負担なしでオープンアクセス化ができます。

02

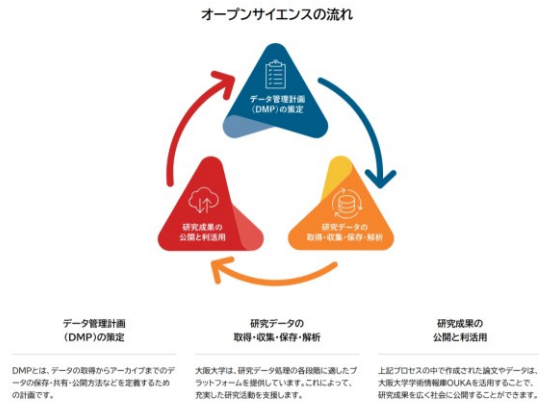
オープンアクセスだから、全ての人が読める！
学術誌への掲載だけでは、一部の購読者しか読まれないことがありません。OUKAによる論文公開は、あなたが書いた論文をもがアクセスできるようにする仕組みですから、インターネットを介して世界中の人に読んでもらうことができます。

03

国は、オープンアクセス義務化に動いている！
国は、特に公的資金による学術論文に対して、国民に還元すべき国際的な知的資産と捉え、オープンアクセスとすることを求めています。当然ながら、研究費を得るためには、オープンアクセスを推進していることは、もはや必須と言えるでしょう。

04

データ管理・共有に煩わされない！
研究過程で収集・作成された資料やデータは、管理が非効率かつ煩雑になりがちで、時に研究に動くべき時間を奪われていることも少なくありません。大阪大学が提供する研究データ基盤(GakuNin/ONION、ONION、OUKA、研究マナジメント統合支援システム)を活用すれば、チーム内でのデータ共有を容易にし、データの散逸防止や研究の効率化を実現できます。



研究データ管理・オープンアクセスを実践しましょう！

データ管理計画 (DMP)の策定	研究データの取得・収集・保存・解析	研究成果の公開と利活用
<p>＜実践編＞</p> <ul style="list-style-type: none">データ管理計画 (DMP)の作成 <p>＜学習編＞</p> <ul style="list-style-type: none">大阪大学研究データポリシー研究データ管理計画 (DMP)とは大阪大学が提供するデータ基盤	<p>＜実践編＞</p> <ul style="list-style-type: none">データを取得・収集するデータを保存・管理するデータを解析する <p>＜学習編＞</p> <ul style="list-style-type: none">研究データを取得・収集および保存・共有する関係法令および規程	<p>＜実践編＞</p> <ul style="list-style-type: none">論文をオープンアクセス (OA)にするには大阪大学学術情報庫OUKA (機関リポジトリ)によるオープンアクセス英語論文投稿を推進業務を活用したオープンアクセス研究データを公開するには研究データもOUKAで公開する論文・研究データ以外のオープンアクセス <p>＜学習編＞</p> <ul style="list-style-type: none">オープンアクセスの動向国のオープンアクセス基本方針への対応方法学術情報流通に関連する情報

大阪大学オープンサイエンス推進室 研究データ管理・オープンアクセス支援

動画学習教材でRDMの基礎・実践を学ぶ

研究データ管理(RDM)基礎編動画

RDM基礎編ウェブサイト_1 甲斐 倫人

RDM基礎編ウェブサイト_2 甲斐 倫人

オープンサイエンス時代における研究データマネジメント基礎

研究データポリシーと関係規程等

実践的な教材の整備・展開の具体例(人文学データ)

人文学研究者の多くが一次資料の代替となる高精細な画像を用いた分析を求めている。
⇒画像および動画の相互運用を推進する国際的な枠組みであるIIIF(International Image Interoperability Framework)に着目。
※IIIF画像を用いたキュレーションや教育への応用、ならびに機械学習のためのアノテーションデータ付与機能などの開発が盛んに行われている。

OAQS_IIIF1 甲斐 倫人

OAQS_IIIF2 甲斐 倫人

グローバル日本学教育研究拠点「拠点形成プロジェクト」
～人文科学分野向け研究データ管理を促進するデジタル・ヒューマニティーズ学習教材開発～

人文学研究者必見！研究データ管理とははじめ
--- OUKAで始めるIIIF画像の公開と利活用 ---

2. 研究データの管理

データを保存・管理する ーONIONでデータを保存・管理するー

研究プロジェクトの事例

本事例は、大阪大学の研究者(Prof. A)、学外の共同研究者(Dr. B)、大阪大学の大学院生(Ms. C)、および学部生(Mr. D)で構成される共同研究プロジェクトにおいて、研究データエコシステム(ONION-Object)を活用し、データを共有・管理するための具体的な手順を示したものです。なお、プロジェクト代表者には大阪大学の研究者であれば、だれでもなることができます。

グループ管理者

メンバー

Prof. A

Dr. B

プロジェクト代表者
(学内教授)

共同研究者
(学外研究員)

2. メンバー間のデータ共有(Prof. A から Dr. B への共有を例に)

2.1 データ所有者(Prof. A)による共有権限の設定

バケット単位またはファイル単位でグループ全体または個別のユーザへの共有設定が可能です。バケットへのアクセス許可(閲覧のみ)、ファイルの共有(ダウンロード)の順番に行なっています。

例1: project-a-bucket を例に、すべてのメンバー(Dr. B、Ms. C、Mr. D)にアクセス許可(閲覧のみ)を与える場合:

2.1.1 まず、① BUCKETS 画面で共有対象のバケット名を選び、② Properties をクリックしてください。

BUCKETS	OBJECTS	
		➕ ADD NEW BUCKET
NAME	REGION	POLICY
info-bucket	osaka-u	EC42
project-a-bucket	osaka-u	EC42

研究成果の公開と利活用 ー機関リポジトリによるオープンアクセスー

公開手続

1. 共著者の同意

研究成果に共著者がいる場合は、あらかじめ共著者の同意を得てください。同意を得る方法は問いません。なお、共著者の同意について図書館に文書等を提出する必要はありません。

同意取得用のメール定型文(日本語・英語)を用意していますので、ご活用ください。

<https://www.library.osaka-u.ac.jp/research/openaccesspolicy/>

2. 公開用ファイルの準備

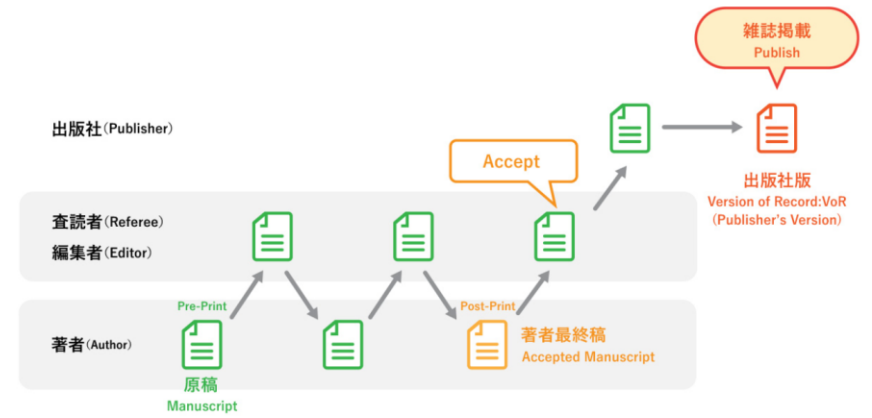
OA出版していないジャーナル論文を機関リポジトリで公開する場合は、出版社の著作権ポリシーによる条件を守る必要があります。海外出版社の多くは、「出版社版」(電子ジャーナルのPDFや誌面のスキャン)をリポジトリに登録することを許可していません。代わりに「著者最終稿」であれば、多くの出版社は登録を認めています。

下の図のように「査読者・編集者とのやりとりを受けて著者による修正が済み、最終版として受理された段階の原稿(Acceptされた原稿)で、コピーエディティングやレイアウトが施される前のもの」が著者最終稿です。

論文に付属するデータ(Supplemental data)、図版、表などのファイルも一緒に公開することができますので、これらのファイルもご提供ください。

※出版社にAPCを支払うことによりOA出版された論文は、通常リポジトリに出版社版を公開できます。

※政府の公的助成を受けた研究成果の即時OA義務化方針では、論文付属の研究データ(論文出版にあたり公開することを出版社が求めるデータ)もOA義務化の対象となっています。



【参考】

学内限定 主要出版社における機関リポジトリへの登録可否(PDF)

学内限定 主要タイトルにおける機関リポジトリへの登録可否(PDF)

まとめ – ご一緒に、研究データエコシステムを

- 体制・ルール × 基盤 × 人材 をつなぐ視点が不可欠
- 小さな成功を積み重ね、学内で「できる」雰囲気醸成
- 課題は共通、解決策も“シェア”できる可能性
- 相互に学び合うネットワークの構築

本日の議論が、皆さまとの今後の協働に繋がると幸いです

ご協力者への御礼

本講演の準備と実践にあたり、多大なるご支援・ご協力をいただきました、国立情報学研究所、共同実施機関、本学関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

ご清聴ありがとうございました